

和刻本佛典邦人序跋集成

成田山佛教圖書館之部

會谷 佳光 編

前　言

本書は、和刻本佛典に収載される邦人の序跋を集成したものである。現存する和刻本佛典は膨大な數に上り、その總數を把握することすら容易でない。まして、その中から邦人の序跋を収載するものを抽出することは困難を極める。そこで現實的な方法として、所藏機關ごとに和刻本佛典を調査し、邦人の序跋を收集していくことにした。今回收録したのは、成田山佛教圖書館所蔵の江戸時代に出版された和刻本佛典に収載される序跋である。

邦人序跋の收集作業は、二松學舎大學C.O.E研究員在任中の二〇〇四年十月から二〇〇六年三月にかけて行つた。調査に當たつては、成田山佛教圖書館の全面的な御協力を仰いだ。また本書には成果を盛り込めなかつたものの、二松學舎大學附屬圖書館・國立公文書館内閣文庫・財團法人東洋文庫においても各館所蔵の和刻本佛典の悉皆調査を行つた。その他、國立國會圖書館・東京大學總合圖書館での調査にも取りかかつたが、力及ばず調査を完遂できなかつた。成田山佛教圖書館での調査では、二松學舎大學C.O.Eプログラム研究助手（當時）岡野康幸氏の協力を得た。調査に御協力いただいた關係各位・各機關には、ここに記して厚く御禮申し上げたい。

具體的な作業手順は、次のとおりである。まず膨大な成田山佛教圖書館の藏書中から和刻本佛典を抽出する作業を岡野氏が行い、それをもとに會谷が書誌調査、邦人序跋の確認、序跋・卷首・刊記等の撮影を行つた。その後、業者に依頼して序跋の翻刻を行い、それを會谷が確認・修正するという方法で作業を進めた。しかし行草體で書かれた序跋の解讀に難儀する等、編集作業は遅々として進まず、高山節也・小野澤路子兩氏共編の『和刻本邦人序跋集成　經部』の刊行から約二年経ち、完成が今日に至つてしまつた。誤りも多々あろうが、ここに公刊して博雅の士の指正を俟つ次第である。

平成二十五年一月二十一日

會谷 佳光

目次

邦人序跋作者索引	和刻本佛典邦人序跋集成 成田山佛教圖書館之部									
	ら行	や行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行	あ行	前言
102 106	096 101	092 095	071 091	068 070	048 067	030 047	011 029	001 010	凡例	目次
序跋 15 件	序跋 7 件	序跋 7 件	序跋 45 件	序跋 3 件	序跋 26 件	序跋 24 件	序跋 25 件	序跋 13 件		
83	79	74	55	53	38	22	8	1		

(1) 1 v iii i

一本書は、成田山佛教圖書館所藏の和刻本佛典の中から邦人が漢文で著した序・跋・凡例等を集成したものである。調査した和刻本佛典は六百五部に及び、そのうち百六部から邦人百三人の著した序跋百六十五件を收集した。

邦人序跋は、これを收載する和刻本佛典ごとに收録した。和刻本佛典は内容分類によらず五十音順に排列し、收録順に三桁の通し番号を附した。なお經典名に「佛説」・「鼈頭」を冠するものは第三字以降の読みに従つた。同一の序跋が複數の版に收載される場合は、最も古い版に依據して翻刻した。後の印本・重刊本で、序跋が追加されている場合は、元版と同一の序跋は收載せず、新規に附加された序跋のみ收載した。また黄檗版大藏經の收録經典にはしばしば卷末に千三百點前後の募緣刊記が見られるが、すでに大槻幹郎・松永知海共編『黄檗版大藏經刊記集』（思文閣出版、一九九四年三月）に景印收録されていることから、本書には收載しなかつた。收載項目は、和刻本佛典の書誌・邦人序跋からなる。書誌は書名・別書名・巻數・譯著者名・出版事項・請求記號を著録し、邦人序跋は序跋の作者・タイトル・本文を收載した。序跋作者の姓名字號が一部不明である場合は、一字につき「□」で記した。

推測・補足した文字は、「〔 〕」付きで記した。

序跋の作者・タイトルは「【 】」内に記した。序跋のタイトルを版心題から採った場合は、「[「阿毘達磨俱舍論序(版心)」]」のように記した。序跋に句點・送り假名・返點・縱點・四聲點等が附されている場合は、「【 】」の下に「(送返點)」のように記し、無點の場合は「(無點)」と記した。

序跋は、書體にかかわらずすべて翻刻した。ただし行草體で刻された序跋については、編者の力量不足により

判讀を誤つた箇所があるものと危惧される。本書に收録した序跋を資料として用いる際には、成田山佛教圖書館にて現物と對校されたい。

異體字は、極力舊字に變換したが完全ではない。

梵字は、ローマナイズして「hōmā」のように記し、その譯語を「[護摩]」のように記した。
序跋の末には印の形通りに印刷された印記、所謂「刻印」がしばしば見られる。この刻印も翻刻の對象とし、「忍激／之印」のように記した。

判讀できなかつた文字は、一字につき「□」で記した。

原文に使用される小字や割注は、小字單行の場合は「へ」、小字雙行の場合は「へ／＼」のように表記した。

卷末に「邦人序跋作者索引」を附した。

和刻本佛典邦人序跋集成 成田山佛教圖書館之部

會谷 佳光 編

あ 行

阿吒婆拘鬼神大將上佛陀羅尼經 → 豊山藏版祕密儀軌六十二種を参照。

阿吒婆拘咒經 → 豊山藏版祕密儀軌六十二種・阿吒婆拘鬼神大將上佛陀羅尼經を参照。

001

阿毗達磨俱舍論三十卷壇音釋 唐釋玄奘奉詔譯 天和三年京都獅谷升蓮社釋忍激重刊本 四八一三〇〇（口）

【信阿忍激〔跋〕】（無點）

新譯俱舍論凡三十卷以洛東獅谷升蓮社藏本鏤梓行世 天和癸亥四月初八之日 「信／阿」「忍激／之印」

002

阿毗達磨俱舍論三十卷壇音釋 唐釋玄奘奉詔譯 日本釋隆榮校點 天和三年京都獅谷升蓮社釋忍激刊弘化二年序校
修本 四八一三〇〇（口）

【隆榮龍謙「校刻阿毘達磨俱舍論序」】（無點）

校刻阿毘達磨俱舍論序

佛日隱西聖星隨轉世間昏闇都執漸奧一味玉牒終成二十各造對法殊其幽源雖似分斃在論是非使其學者泣涅槃岐爰世親大菩薩降靈於閻浮提於薩婆多出家褰慧炬燭本路道超二乘學窮大小名秀五天德溢四海迹示同座說於有空本地妙極實難思議祕慮定室乃制宏論拔八蘊萃貫六足藥懷八萬之寶聚議廣說之真義分九種之教藥除諸部之堅執理無不窮其源事無不盡其際固有宗之天鏡對法之洪源也昔奘三藏振錫西天遠尋聖跡求傳燈師內外縹緲悉包心極曩哲所遺備貫情樞再譯貝葉規模俊穎三千龍象伏膺饋仰然旧國字頗有參差初學之者病諸尚矣今也有好古人請校正於不敏來扣音響難默講餘披卷函杖卽對閱於諸軸冠顯文字之異間正傳寫魯魚並改國字舛錯寡聞單思刪定有謬庶幾博達正之云爾 弘化二年乙巳夏四月 洛東智積池舍沙門龍謙謹撰 「釋氏／隆榮」「龍／謙」

【寶雲「阿毘達磨俱舍論序（版心）」（句送返點）】

龍謙師曾不相知其學之長短亦不相知弘化乙巳校定俱舍論其之得失亦不相知校定成書賈某請予一言予將何言俱舍論之東一千餘年講學之盛爲東大寺初有樹朗永觀珍海等後有聖禪快圓定春等相繼日夕研究討論當時俱舍論無可校定者支那國趙宋以後佛法衰廢癡禪徒蔓衍其所學者論語唐詩選學之暇日募緣聚財喜校刻大藏經以令魯魚混淆至不可讀乃自趙宋至明校刻大藏經者或曰宋本或曰高麗本或曰明南本或曰明北本皆癡禪徒爲之本邦黃檗山亦癡禪徒翻刻其明北本而本邦近世東大寺之學廢典籍滅亡俱舍論唯存癡禪徒之校刻在大藏中者以故近世雛僧欲學俱舍以幼弱之眼就魯魚混淆不可讀者亦可哀憐龍謙師之校定則有益於雛僧乎 筑前寶雲識 「三界／无家」「杜印／雲」

【雲華大含「題俱舍論校點後」（無點）】

題俱舍論校點後〈六十六州／游說遍〉

我邦内外學人讀漢土書固旁施國訓幹旋文字以取其義古有於古止點後漸隨便宜前後成句上下爲讀其習尚矣智山龍謙師密乘佛子而通顯教比較俱舍論本且改舊點之誤能欲而通曉業□後以授剞劂流通十方大有裨後生□余也因緣之薄會

聞其德香未見慈容一日余所知識大通寺僧某來爲請其後序固辭再三不許乃有感乎心遂諾爾時安居之初講教無暇法用忙々荏苒不果深背其誼最爲慙愧今遽述所懷以塞責其若校本之得失與改點之可否善□者知之不敢贅也 弘化二年七

月 雲華大含時年七十三識於平安六條 「大含／印信」「雲／華」

003

阿毗達磨俱舍論本頌一卷 唐釋玄奘譯 日本釋圓明校 江戸期中野宗左衛門據紀州根來寺西谷理趣院釋圓明校刊本
重刊 ち〇三二〇一九

【圓明「校記」】（無點）

右世親造六百七頌也 紀州根來寺西谷理趣院苾芻圓明校正焉

004

〔鼈頭〕 安樂集二卷 唐釋道綽撰 日本釋不必首書 貞享四年京都平樂寺村上勘兵衛刊京都藤井文政堂山城屋佐兵
衛後印本 四九一四九

【不必「跋」】（送返縱點）

跋

頃者爲二三子也欲講於是書故出據經論文字事跡隨所管見而隨書隨講也此所謂欲令勸信求往甘時一小鰥竊得余於講
本擬命書林而鏤梓也余愕然曰汝冒於此書具信願行遂乎往志則已矣胡爲涉獵文句乎踟躕修行耶況哉夫乎今所評註者
膾炙人口文也汝若爲他說者宛是寮東之豕所呵笑必焉宏才之所指何逃乎小子曰蓋聞荆山之人以玉抵鵠爲行人所寶今
也師爲是塊礎也小子以爲如珠玉執固不敢肯故再點檢補正文字誤脫改點句讀參差應渠需也是所謂黃葉止啼而已後之

君子知予罪予一而不能辭云爾 呂貞享三龍次柔兆攝提格大呂上澣寓願生精舍 蓮宗後學 不必謹書

005

〔鼈頭〕 一行禪師字母表一卷 卽悉曇字母表捷覽 唐釋一行撰 日本釋普寧首書 享保十一年刊本 ち一二六〇一
四七

【普寧】〔跋〕（送返縱點）

享保十一龍集丙午歲六月廿七日□科冠註之者也 普寧 「□／明氏」「清涼／金剛」

006

佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經一卷 唐金剛智譯 日本淨眼範榮點 嘉永元年跋京都金屋佐兵衛刊本 ち一五三五
十四

【淨眼範榮】〔跋〕（四聲點）

嘉永紀元歲次戊申仲冬應制刪氏之需附四聲清濁之星點畢 雜東智積輪下淨眼範榮

007

異部宗輪論述記一卷末一卷 唐釋玄奘奉詔譯 唐釋窺基記 日本釋實養點 安永三年京都中野宗左衛門等據元祿九年刊本重校刊京都額田正三郎後印 四八一三三〇（イ）
【大同房基辯】〔校刻異部宗輪論疏叙〕（句點）

校刻異部宗輪論疏叙

異部宗輪論也者世友菩薩之所作也宗謂異部所崇之理輪謂顯能摧之用辟諸王之有輪寶而能無不駐寇殄怨也於乎賢劫之應真何翅爲學小乘者亦愍澆末之世人作異競遂令大乘之玄軫枉于殊途也我慈恩大師爲之疏蓋亦在此乎可謂此書也亦記路之的標也奈何輓近法與世降雖其脂轄大乘者取道險地輒轍折阪蹉焉跎焉猶失輓然疇知闇々然談心性本淨全同大衆部喋々乎說因緣假有尚混說假部是豈有它取標之不正也不可不慎焉而今行之疏本錯簡多々讀者或病〈基辯〉曾住南京之日得善本一卷韞匱重襲以自珍焉屬日有近事廣流者志存法住以促公世勸誘丁寧不啻連城〈基辯〉常有意弘法何空求善賈爲遂附梓云庶後進之子能無廢之則終以見照乘之光亦方無行大乘於險地之失云爾時明和九年龍集壬辰春正月南京留學傳法相宗沙門釋〈基辯〉撰「三昧」「大同房」「基／辯」

【長與實養「鍥異部宗輪論述記敘」】（送返縱點）

鍥異部宗輪論述記敘

如來泥洹後雖世間眼滅而迦葉末田等傳持法藏微言尚存焉經百有餘年暨乎鞠多之學無所稟大天之辯亂真詮乖競肇興部黨爲二所謂大衆上座是也從此以降上座破成十一部大衆分爲九部以如是見網爲纏使其學者眩亂絳無緒泣大路有岐矣世友大菩薩挺生于四百歲後熾然慧炬作世明燈又嘆緇流澆浮甲是乙非蜂起溪分因造此論以解紛指歸焉且傳度支那國者陳眞諦始譯並製疏唐三藏糾正前譯重出新翻基公編爲述記剔抉古師之未了於舊疏繁文筆則筆削則削實大作也何止讀小論有裨而已哉於大乘教中爲攘斥部執撮略而出一二者亦不必攬此成文則寧得知其起盡耶繇旃卒加倭訓壽梓欲布遐邇冀好古之徒思折杖爭衣之喻又擇取沙中真金矣旨元祿九年丙子仲夏穀旦奧州仙臺龍寶住持比丘長與實養書于洛之東山智積輪下僧行居「長與／之印」「實／養」

【探盈「重彫梵漢心經後序」】（無點）

重彫梵漢心經後序

蓋聞金口經說修新不如補故其福更多矣於此心經也鏤板雖傳于世人多不知之而競寫之恨舊本頗有脫謬處今茲書肆圖再鋟而請校訂故依數梵本削剩補闕考正之以屬卷尾覽者舊本參讀之則其疏謬可審譯經亦少有異補故記之于冠願欲永傳于不朽其福遍潤羣生云爾 維時寶曆壬子八月望日 水戶沙門探盈謹誌

009

因明入正理論一卷 唐釋玄奘譯 正保五年跋釋岳譽刊文臺屋宇平求板後印本 四八一二六一

【岳譽「跋」】（無點）

今此論者以佛道正直匡分宗邪曲墨繩也因茲西域陳那〈天主之屬〉製正理門論弘五天門徒天主〈陳那之資〉造入正理論流來葉三國傳來歲久〈矣〉誠昔出朝諸宗求學輩口學之就中相宗依爲依論專習傳之然至近歲學柔漸廢頗可謂無念爰以此雖非淨家法則自經藏取出之加和點但南都藏公之點聞遠故加愚點冀多聞強識學者爲清決〈矣〉假爲弘通令開板之者也 于時正保五〈戊子〉歲正月下旬 淨土比丘岳譽

010

因明入正理論義斷一卷因明入正理論義纂要一卷 唐釋惠沼述併集義纂要 明和四年京都丁子屋庄兵衛等刊本 四八一二六六

【宗朗「刻因明義斷纂要序」】（句送返縱點）

刻因明義斷纂要序

內典之富莫富於南都而多未弘傳也蓋古者天子數召南北高僧於宮中論議試其義學是以號稱蹀腹戴盆擊鼓拔旗者亦或竊資於帳中之祕卽諸名書藏諸寶庫守之彌堅後世性相之學廢先文散失僅存什一流傳人間不過供魯人路費賈豎射利而已矧乃傳寫數易易至於舛誤錯脫而有不可曉者夫華僞之文敦厖之朴交錯載道采用施行必皆率由爲以益己也千金折而不與亦獨知輒自恃與其已亡齊懸衡也必也弘傳乎弗而多誤穀而易壞弗如木之久且正焉既然其弗如何世乏曹會者也余幼志于學妄意願刻盡天下古書日得此書喜甚夫因明者大義之門入孰不由是沼公以英拔之資解論疏肯綮若其斷四相違避迭羣議因自參考數本緝理粗就則刻書之業自此始夫四海之內有與余同志者博索旁搜所獲刻之能使益己者不壅獨知者不匿又能使收最殘不中用者盡去之師古役今知所勤而有所詣也合斯微功一匡勝法不亦樂乎迺內典之富非賣南都焉而有於天下矣

寶曆丁丑春二月

釋宗朗謹撰

か 行

011

科金剛界蓮華部心念誦儀軌一卷 唐不空奉詔譯 日本釋叡尊科文 貞享二年跋前川德右衛門刊本 四六一一（イ）
【前川德右衛門「跋」】（無點）

右興正菩薩科文儀軌欽刊行焉皆貞享乙丑仲冬吉旦前川德右衛門

012

科註妙法蓮華經八卷 宋釋守倫撰 明釋法濟校 延寶八年京都平樂寺村上勘兵衛據崇禎元年二年吳興閔夢得刊本重
 刊 四六一四四五

【即中「新刻註法華經序」】（句送返縱點）

新刻註法華經序

今世流布科註序云有倫法師嘗註此經今習善徐居士慨茲印版湮沒悉取其經依科分註起倫師已墜之書開後學易入之徑
 雖曰柯山之述註實皆天台疏文然余幸得倫師舊本一帙把玩不已自珍不與人俱時校于今本往往非無過不及是以近世講
 者垂講爲難辨也因遺固陋竊訓其傍隨科註之兼加評於楮餘以授剞劂氏欲再弘倫師註經令講者易辨也覬挹流尋源聞香
 討根之流或發一句解或生一念信而染其神則其利無窮是吾流通之志也 皆延寶戊午秋七月自恣日 阿陽沙門即中書
 於小石蘭若

科註妙法蓮華經八卷 元徐行善撰 元釋必昇校證 天和三年中野氏刊本 四六一四四六（口）

【中野氏〔跋〕】（無點）

此科註頻年雖流布于世因甚有謬誤今更改訓點削衍字且修補字畫之闕失以行之者也 天和三〈癸亥〉仲冬吉旦 中
野氏板行

觀自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生薰真如法 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

觀自在妙香印法 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種・觀自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生薰真如法を參照。

觀所緣緣論 → 四論を參照。

〔鼈頭〕教誡新學比丘行護律儀一卷 唐釋道宣述 日本釋天榮首書 元祿三年跋刊本 ち五一〇一一

【天榮「跋誇」】（送返縱點）

跋誇

靜以戒法者菩提之根源道器也今此教專教比丘本志一誠行者邪思誠初門之人者先學此歟時有客來顯書爲請焉余昧劣而無慧力況夫戒律部事廣非學不知何爲容易客曰與僕曖律部余曰諾爲染筆昔日華洛證上人曾分科諦說此一軸今依彼科乃濶於譲法卽題而謂辨蒙者是也庶將來學士立志堅強日益日損焉若然者報俱佛恩及師恩者哉 無量山勤息加州如來教寺直弟天榮比丘謹書 元祿三庚午曆初冬吉旦

015

教觀綱宗釋義會本二卷 明釋智旭述 日本釋德義會 享保三年淺野久兵衛重雄刊本 ち六一一二一〇

【慧陳德義「會教觀綱宗釋義叙」】（句點）

會教觀綱宗釋義叙

大矣哉吾宗教觀之爲道也教謂五時八教觀乃三觀十乘橫豎通別廣大精微迥出諸宗之上最合佛意學者若寓眼於三大五小則不啻曉一代漸頓法門十方三世諸佛法門亦可了矣盛乎美乎蓋不可得而思議焉嗚呼世下學衰但讀四教儀一書消日歷年安知一家教觀之蘊悲哉明始日大師每歎之謂四教儀行而台宗昧而會撰斯書以垂後世其爲書也舉一家教觀之綱宗且作之釋義大有益乎學者非四教儀之所能及也〈余〉曾因講次分會其文開爲兩卷改加國語頃有勵生來乞重刻之遂序上諸梓云 享保二年丁酉之秋台麓菩薩沙彌慧陳〈德義〉叙于京兆客舍 「慧／陳」「雷堂／道人」

016

〔鼈頭〕夾註輔教編十卷 宋釋契嵩編併注 日本梁巖□湛首書 元祿九年植村藤右衛門刊出雲寺松柏堂後印本 八五一—八〇五

【梁巖□湛「冠攷夾註輔教編跋」】（送返縱點）

冠攷夾註輔教編跋

此編之傳吾國也發軔于無隱晦禪師而假刊行之手於春屋葩老普明國師自時厥後經三百餘祀而諸有之叢林咸祕藏以鎮矣然明教大師望高二宗學該三教波瀾浩蕩竟難窮涯涘是故讀者慨然掩卷而已年累歲私憂之自謂若有當世雋爽士考覈之善本則迺就而抄出之徧求而未獲焉時同志之士暨二三徒子請余曰此編也能使晚進審知儒釋一貫之旨者豈止如中流

得鉅箋耶然紀事淵博而學者動至于膠柱矣冀討校羣籍以冠諸卷頂而爲壽梓則所珍於世者貴過拱璧也余曰吁子之言然矣余亦志于斯舉者積有年焉然才闇涉獵識匱采擷而未果其所懷借令有一二之可據摭亦以爲僭越疇克充其責哉固拒而弗久今茲乙亥之冬藁既就緒其顧引證者不核據事者無根或簡約或煩冗而邈乎未能造詣精微之域但竊踵晦葩二大老之高躅而俾□日重灑慧炬再燃則余素足于此矣倘於博綜之儔則把作瓿覆亦曷悔恨焉鄙意惟在乎護法禦侮而復且應副於全志士暨二三徒子之懇求焉耳如夫知之與罪者未嘗始加損也因以斯爲跋 元祿乙亥蜡月上浣住阿陽黃龍嗣祖沙門梁巖

〔湛〕譏并書 〔梁巖／氏〕「南□／□印」

【眞際「輔教編後跋」】（無點）

輔教編後跋

大道體性至聖眼目寂爾非隱顯了然虛假見々不見相々離相理事無礙而二諦廓如々者使惟浮圖□識凡庸之輩不省自法奏已而苦具□□邪見妄發認□紊真頑固敷縱逆公順私返觀□不得喧遺盛甚夫大師憫其□生日救時運之乖違分解內典勞據外學而杜異見之妄言示因果之直證近屬於五常之仁義證舉皇極以詳辨原教及廣教乃釋儒之理內外通曉以致使破邪證之□□者要其本質也□於宗之□所訂略這編其言必□誠正□誠策於總□焉旨哉皇化訓成圓理以昭神之爲神也回攝了義滿近法之爲法者□善□攘邪說乎將來者也 維時文久改元辛酉結制之日 現住建仁如々叟眞際敬述 「靈松
／遺韻」「眞／際」

017

金七十論三卷坿音釋 陳眞諦譯 日本釋如海點 元祿十年京都村上平樂寺重刊本 四九一一四〇（イ）
〔如海「金七十論跋」】（無點）

金七十論跋

外道二十五諦但知名數而不解其義者惟多也依此〈余〉暇日繙此論加倭訓而梓行也嗚呼竺乾外道之智勝支那孔老之道也遠矣況乎吾迦文法王微妙甚深之法不待言辭可信其高遠而止矣加點既卒仍題數語爲之跋焉 廿元祿乙亥臘月穀
日 總之下州飯高妙雲山法輪講寺住侶〈如海〉謹識

018

俱舍論釋頌疏義鈔三卷 闕卷下之本 唐釋惠暉述 慶安四年跋京都前川茂右衛門校刊本 ち〇三二〇一六

【前川茂右衛門「跋」】（無點）

此本者南都於東大寺大喜院塔中以清涼院本校合〈并〉點加畢 慶安四年〈辛卯〉仲冬吉日寺町通四條本屋前川茂
右衛門板開

019

啓建三千諸佛法懶嚴淨儀範三卷 □闕名輯 日本釋道濟輯校 貞享五年跋京都大和屋堀河伊兵衛刊本 ち〇一九〇

一四

【道濟「跋」】（無點）

三千佛名經行乎世久矣其版譌訛儘多如莊嚴劫所欠五佛星宿劫所欠一佛是也至若前後失序者其多矣今不可不革也故
不忍釋手依藏本長字函而校正之其闕者補之其紛者次之而復令書林印板施行庶幾有四衆助之者與諸方承事三世諸佛
者共之理事得無障礙出沒得大自在頓登覺岸同游智海 貞享戊辰春王正月吉旦攝之紫金山沙門道濟焚香和南拜書

〔鼈頭〕華嚴一乘教分記三卷 卽華嚴五教章 又云華嚴經中一乘五教分齊義 唐釋法藏撰 日本釋觀應首書 寶永三年村上勘左衛門前川茂右衛門村上勘兵衛刊本 四八一一三（口）

【觀應「華嚴五教章冠註大例二」（送返點）】

華嚴五教章冠註大例

一章凡有二本一本邦從古所流者一宋朝所行者而今冠註但註於本邦本也然其宋本與本邦本卷次有齟文語或乖故今冠註文乖者附離之行傍卷齟者標揭之上方

一章中引用經論疏記卷數或有異現本者蓋劑卷古今不同無足怪者今冠註所錄皆從流行本也

一若義苑折薪復古集成諸記並解宋本也若本邦纂述指事通路纂釋諸家皆釋本邦所流本也而今冠註開章分科一襲通路然夫通路曾缺數策無復全本可以讎閱故至其缺遺且藉復古科補苴之爾

一通路解章綱繆委曲今冠註引援此記往往不厭繁冗意在乎藉使蔓延語辭庶幾源委義旨爾亦通路所引義苑之文間有脫于行本者今對校贅之各處冠註

一大抵冠註引用諸記雖復古義苑盛布濩于世者杳扢瀰漫不知底極煩彌雜深憚嗤譏惟竊自謂途程之笈寸楮嫌煩庠間之包片蹠欲省誰攜數部寧帶衆函亦夫案間有限豈得擅樂諸家眼眶既羸未易酬酢多弓況且篝燈耿青丙夜嶮巇探箱山畧斜黃炮窓倥偬攤葉凡於此數者豈無少裨益哉論曰教無定相利益爲定若塵芥有利何不稱佛心乎

一曩釋前解關繫此章者擗摭異家采擷他籍莫不載焉語有云千金之裘非一狐之腋泰平之功非一人之略者蓋集衆美之謂也

一四聲區響清濁判音吳漢非無庸須讀難定守平去相爲賓主聲誰執常加之衆刹殊諷諸家各習亦學者之所爲難而教饗之所以崇從來尚矣然近時浮薄概然蔑置未曾留意開口侏離轉舌鷄鳩一何悲哉故今冠註自不揣量依曾所聞于師點記四聲清濁惟繆悠黯劣差舛奚鮮讀者怒貸改竄是幸

一冠註之作飣餉諸記邃淵綴旒前脩窈眇片辭半語未嘗出胸臆者也以故說不敢慮無根辯誰有謝僭越惟援寫率略之訛文字陶陰之差龍駒猶蹠鷺蹇豈免冀觀攬君子爲是正焉 寶永二年乙酉之歲寓智積教院東海沙門觀應槃譚識

華嚴孔目章 → 華嚴經內章門等雜孔目を参照。

021

華嚴經探玄記二十卷 唐釋法藏述 元祿十六年井上忠兵衛等刊本 四八一一（口）

【實養長與「鍥華嚴探玄記序」】（送返縱點）

鍥華嚴探玄記序

主教圓通啓嘉會於塵國帝珠方廣攬勝場於毛界無礙融盧舍那之妙境有崔泯普賢眼之極談窮理盡性徹果該因汪汪素範難得而測者其唯華嚴經乎此經總有三本四十華嚴般若三藏譯清涼作疏解之八十華嚴學喜三藏譯清涼又制疏鈔釋之六十華嚴覺賢三藏譯於下本十萬偈內出苅分三萬六千偈者是也初至相儼和尚疏搜玄記而傳其文也玉寡其理也金相追琢不可得矣賢首國師以獨傳學脈親得道髓更撰探玄記二十通先搜則艱焉列十門而擇之之勞後探則便焉尋一經而取之之速藉令陸可無車水可無楫而學華嚴教者不可一日廢之余曾掛瓢智積之日會得此眞本頃歲以善病故不能沈潛考鏡貯藏經笥久矣今應印生之懇勤僭和訓第恐大士之祕詮湮沒于世有埋璧沈珠之嘆因公於諸方以欲流衍耳間至取分外之嗤而不強改遂弁數語於冊併授之 告元祿壬午春三月初四之日東奧仙臺龍寶比丘實養長與畔題敬識 「實／養」「長與／之印」

華嚴經中一乘五教分齊義 → 華嚴一乘教分記を参照。

022

華嚴經內章門等雜孔目四卷 卽華嚴孔目章 唐釋智儼集 日本釋潭瑞點校 元祿十四年京都宣風坊井上實氏刊本

四六一四三四

【騰雲潭瑞 「跋銕孔目章後」】（送返點）

跋銕孔目章後

歐陽子日本刀歌曰徐福行時書未焚逸書百篇今尚存令嚴不許傳中國舉世無人識古文吁此事也僞乎眞乎未得其可徵者不易與之言矣但至我大雄氏之教籍則寔有不愧所言者而存焉近銕孔目章印生某者令〈余〉點校以偶記之而書爲跋時元祿辛巳仲秋望後 武陵金澤僧雲潭瑞揮筆於京師陸沈居 「騰／雲」「釋氏／潭瑞」

華嚴五教章 → 華嚴一乘教分記を参照。

023

華嚴五十要問答二卷 唐釋智儼集 日本釋實養校點 元祿八年京都丁子屋九郎右衛門刊本 四八一—〇

【長與實養 「鍥華嚴五十要問答序」】（送返縱點）

鍥華嚴五十要問答序

五十要問答二冊者華嚴第二祖雲華尊者撮略雜華之要義往復徵責以解其冝繁者五十餘條實可稱義學之龜鑑者也抑儼公者受稱性之說於帝心大師其製述頗多所謂搜玄孔目十玄及此章等並皆末學據此作蹊徑者不爲少雖然本邦之俗祕書不輒許印刻好古之徒爲之搔首予嚮過名刹討尋而得此章雖思弘通其本大半脫誤不足爲徵弃置篋底者久矣今年幸得善

本對讀校讎補其脫簡正其僞誤傍附倭訓乃諭之剗劂庶幾遐方終古大教偏播使學者見鎔融於毛海證法界於當下耳
元
祿八年乙亥五月穀旦 東奧仙臺龍寶住持比丘長與實養題於洛之智積輪下 「長與／之印」「實／養」

024

解深密經五卷坿音釋 唐釋玄奘奉詔譯 日本釋德龍校點 文化十年跋京都黑石七兵衛據明嘉興藏本重校刊京都丁子
屋定七等後印 四六一四七九

【德龍】〔跋〕（送返點）

一教海甚深一句生无量義一法含無邊理然本邦之讀僅加一點或失多義更誤一訓忽晦玄趣所以南京古則重點訓也斯經
也未得古點本爲誘始學恐加點訓惟恐誤害經意冀探古藏更訂正焉

一格上所掲校註親閱洛西法金剛院所藏宋本及洛東建仁寺麗本而對校之者也其宋本者多與現藏同現藏卽明北藏也瑜
伽所引多與麗藏同雖復非無小異經之與論梵文本異故不煩記

一現藏文字訛者四增上慢之增一處作憎與諸行相之與一處作異現可得之現一處作見此與彼貪之此作比今校之前後文
及諸本而改焉其餘似有訛者若與他本同者存之如如世尊言之如現藏宋藏共訛作謂麗藏獨作如等傍加一小圈別之宋
藏獨訛者五字麗藏獨訛者一字今不煩記 文化癸酉之春二月 無爲信寺德龍識

025

〔鼈頭〕 宏智禪師偈頌二卷 卽明州天童山覺和尚偈頌 宋釋正覺撰 宋釋淨覺編 日本釋玄鈞首書 天明五年刊本
四九一一七四

【寰山「宏智偈頌卷冠序（版心）」】（無點）

天童宏智禪師有遺範流布於世者九弓箴銘偈頌居其一嚮若北面山老師著頌古稱提今又法孫鉗公判璋箴銘偈頌揭典故於上方以便信讀者余聞冀之野多馬羣伯樂之取其良也不問皮毛神骨是相然離皮毛而神骨何處之屬故皮毛中得神骨者深拚皮毛論神骨者淺竟不能得神骨也吾上祖於道亦復然故曰破塵出經唯智本具顯現模象了體佛性悉有見性昔有僧問同安丕禪師曰依教解義三世佛冤離經一字同魔說此理如何丕曰孤峯迥秀不掛煙蘿片月橫空白雲自異由是觀之設震總持辯言語道斷等記大千量文字性空須承言會宗然著皮毛而昧神骨者淺而最淺矣蓋山老之志在欲令後參學者得佛祖之神骨鉗公從而明之也上木告成乃令松應力生來就予乞序筆研固吾宗皮毛也而重鉗公之功與力生之乞聊陳隨喜之情論所以得神骨而與之至其委曲鉗公自序既已悉之予又復何言哉 天明五年乙巳春正月吉旦 東都駒郊吉祥禪寺寰叟盤談 「義邦／頭陀」「號／寰／山」 東江居士源鱗書 「東江／居士」

【玄鉗斧山「斷壁宏智禪師偈頌箴銘記題辭】（送返縱點）

斷壁宏智禪師偈頌箴銘記題辭

古謂瓠巴鼓瑟而淫魚出聽伯牙彈琴而駟馬仰秣恭惟宏智古佛也者芙蓉瑞蕤丹山靈鳳健翼頽頷于九天芳萼綽約乎四海七座機緣組織蝶羅麟錦九脊心畫鼓吹鳳簫師絃無舌之語說無所說非識之智量非思量〈鉗〉也仰瞻尚矣嵩如迷盧濬似兢伽粵斷壁偈頌箴銘記而耳便于鑿壁播於囊螢寔以短縛釣深斗筈探臚緝揭卷冠勤備藻鑑專希流通敢授剖劂倘有乖角可畏後賢請彊正焉云爾 告天明第三龍飛照陽單闕心宿穀旦越之后州僑寓荷谷遍照屠麻鉗斧山盥沐焚香龢南書
「洞山／正宗」「斧／山」「玄鉗／之印」

【何國百川「宏智偈頌卷冠跋（版心）】（送返點）

蓋惟古教照心巫受定力猶車兩輪脗合中道大凡有照心而無定力則誇麗藻有定力而無照心則泥偏乘不泥不誇欲以兩轍々也是故遍照斧山禪師斷壁隱州古佛五語其言如玉兩輪不苦破塵出經圓照大子涉獵內外捃摭典故譬如摩尼映徹五方向背不逃妍媸不染烈光烜然輝騰古今自非煥發前闕啓引後蒙之切焉能至是邪功其偉矣千載之標一時之楷也粵參學禪

人碩大者百舍重趼齎其稿來而責余書卷後余謝不敏不可也聊將五彩黼黻太虛而已 天明三年癸卯冬十一月日 東毛龍華樹下何國川稽首書 「白雲之身／寒月之心」「百川／之印」「何／國」 東都□松亭平俊明書 「松／亭」「俊／明」

虛空藏菩薩能滿諸願威勝心陀羅尼求聞持法一卷 唐善無畏譯 日本釋亮汰校 寬文十二年跋校刊本 四六一五四

【亮汰「校記」】（縱點）

寬文十三年癸丑正月十六日幸得和漢古本一校了

【亮汰「求聞持法經記」】（送返縱點）

求聞持法經記 沙門亮汰述

謹釋此經畧開五門一明翻譯二顯時分三辨請來四開題号五解本文一明翻譯者開元錄十二云虛空藏菩薩能滿諸願取勝心陀羅尼求聞持法一卷〈出成就一切義品〉大唐中天竺三藏輸波迦羅譯〈新編入錄〉儀軌後記及貞元錄所載亦同也二顯時分者開元錄九云沙門輸波迦羅唐言善無畏〈貞元錄十四云唐音正翻云淨師子以義譯之名善無畏〉中印度人釋迦之苗裔風儀爽俊聰叡超羣解究五乘行該三學惣持禪觀妙達其源藝術異能無不諳曉加以弘法爲務豈順教修行誰疑一坐之現證乎

求聞持儀軌記終

【亮汰「跋」】（無點）

先年余攀登勢陽朝熊岳寓虎谿院乃依院主之厚望遽然爲之記然旅亭乏書未能詳考其文義是以今於洛西練若更添削以壽梓焉恨尚其不盡也 寬文十三年春正月日書

金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌 ↓ 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

027

金剛般若波羅蜜經一卷 姚秦鳩摩羅什譯 貞享二年跋釋運廠據宋張卽之鈔本刊 京都智積別院大報恩寺藏版 ち〇

一一〇一一〇

【泊如運敞】（跋）（無點）

貞享二年歲次乙丑秋七月念三日奉爲追賚受業先師安樂壽院賴運大和尚五十回忌摹大宋張卽之先生手書金剛般若經命工繡梓施僧轉諷蓋思括羽之厚恩聊致絲毫之薄報良以福德無邊際品位彌增崇延覃一切衆生普入無餘滅度而實無得滅度者矣 瑞應七十二翁泊如運敞槃譚書 「運／敞」「泊如／印章」 木村叔定恭摹

【道澈月潭】（跋）（無點）

聞昔有一書生善工書嘗以手指作捉筆狀於虛空中書金剛般若經數日便了云此經擬諸天讀誦是人去後此寫經處自然嚴淨雨不能濕爾後每值雷雨牧牛小兒常集其中衣服不沾里人怪之有異僧語里人曰此地空中有金剛般若經諸天於上設寶蓋不可輕犯誠知此經有不可思議不可穢量無邊功德凡見聞者孰不讚嘆乎雒東智積教院有宋樗寮道人張卽之手書金剛經壹卷余曾拜覽其筆法精絕不在鍾王顏柳之下寔希世之珍鎮刹之寶也經後自書云授天童長老西巖禪師因知張公平素深崇佛乘故被禪門碩德賞識若是旦相傳公歿後爲胥江水神得其書者災不能侵是乃菩薩乘大願輪托蹟於娑羅宮中而度脫一類衆生者乎此經自宋洎今垂五百載而楮墨儼然毫無損壞非神龍呵護寧克爾耶 泊如僧正以壬戌夏退智積隱于雒北瑞應山越四年乙丑繕值受業師五十回諱辰欲追修冥福因取其經命工繪墨者摹寫鏤梓以廣流通如上功利非獨報答師恩凡使一切披閱者破人灑之妄執了一心之實相俱乘般若舟航速登涅槃覺岸者也僧正之志尤可嘉尚因贅鄙語以識其

後云 崔貞享二年歲次旃蒙赤奮若孟櫟穀旦峨山嗣祖比丘道澈月潭焚盥敬書 「道／澈」「月潭／氏」

028

金剛鉢釋文三卷壇音釋 唐釋湛然撰 宋釋時舉釋 □釋海眼會 □釋大眞等校 明曆二年仲秋中野五郎左衛門據承應三年跋覆天啓元年刊本重刊 ち六一一二一七

【跋】（無點）

維時承應甲午中夏下旬聊應蒙求少々訓之謹白可畏願緣此書恒爲善友同遇鉢鑿速決眼膜亦決他耳

029

金光明經玄義拾遺記會本三卷 宋釋知禮述 日本釋實乘分會 天保三年序比叡山延暦寺東塔院實光行圓等據釋實乘校本重校刊 ち〇一七〇一一四

【實光行圓「重刻金光明玄疏記緣起序」】（送返縱點）

重刻金光明玄疏記緣起序

大聖世尊出興於世隨機所說教法有大小權實之殊約之佛意則咸無非令衆生開示悟入佛之知見矣而不有大士弘教列祖流通則其益唯限梵土不被他方又限在世不及滅後吾輩雖受生於澆末不蒙聖口直示幸值聖教流布時得隨分利益全由傳持流通可謂弘通切莫大焉故涅槃明若樹若石法華稱若田若里不亦宜哉且原支那本邦弘傳之始自漢明夜夢迦竺初來已來或翻譯或講說或選疏或訂之錯簡令讀者易識焉無非爲流布聖教以益有情婆心深哉而現行金光明玄疏記會本魚魯頗誤國讀多差且附記於疏下字小而不便於讀者衆人病焉吾先師大僧正實乘每憂此事嘗欲校訂之於數本正其訛謬經疏玄記同其位置書記字於黑方內置之於疏記之中間以分本末重鏤梓頻策爲法爲人之志歎過古稀夏日冬夜採毫不怠數年草

稿遂就時前藥樹權僧正覺公適游東台一日謁先師請刻此訂本置版於東塔院先師允其請未幾先師告化覺公亦寂於是東台先師法嗣寄訂本於東塔大眾且囑上梓之事大眾復囑之於〈余々〉不敏奚當其任加之〈余〉棲山一紀之始殊自知根性下劣淨土一門相應機根心中誓之專修念佛萬緣總拋然先師嘗住東台凌雲精舍日〈余〉隨侍座下親見訂正之舉深感其利物之情于今不忘聊繼先師志懺餘稍募資財於有緣縉紳爲校正上梓有年于茲漸成三分之二但因固背專修本志心地鬱滯不進憶想聖境專修念佛則意氣快然爲勇愈知吾因種淺於一家教觀宿習深淨土法門是〈余〉所以不能盡力於刻事也是以怠心懶性經年不果終囑續成於院內大眾々々亦内外紛劇荏苒延年行光澄公見之憤然竭思遂命剏劂竣功自非護法之厚則豈至于此嗚呼此舉之成蓋有時歟於是先師大願既滿予志亦足不愉快哉冀此書流通於十方盡未來際廣令衆生遊於金光明法性又願喜捨資貶縉紳同沾圓種共開發佛之知見〈余〉見刻成不任隨喜聊染柔翰記其始末爾 天保三年
歲次壬辰仲冬下澣睿嶽相似菩薩僧實光謹誌 「實光／之印」「行／圓」

建立曼荼羅護摩儀軌 ↓ 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

さ 行

030

三聖圓融觀門一卷 唐釋澄觀述 貞享二年跋修禪要訣五蘊觀合刊本 四九一五八

【〔跋〕】（無點）

貞享二年乙丑仲秋念一菴於南都邸舍抄之

031

刪定止觀三卷壇天台止觀統例一卷壇天台智者大師傳論一卷 唐梁肅輯併撰壇錄 日本釋元政校 寬保三年京都錢屋庄兵衛據寬文元年跋艸山元政刊本重校刊 ち六一一一四

【艸山元政 〔跋〕】（句送返縱點）

按河東崔恭序梁氏集稱凡釋氏之製作粹美深遠天下無以抗敵嵩明教品論謂陳子昂之文不若李華々之文不若梁肅々之文君子或有所取也夫叙梁氏事迹莫詳乎釋門正統余因校刪定止觀乃揭之於其後且又系以一二評人若讀之則知肅之爲學爲文矣吾復何述焉 寬文元年五月十三日艸山元政書

【錢屋庄兵衛 〔再校記〕】（無點）

〔埋木〕 寛保三年 〈癸亥〉 五月穀旦再校 京書林 堀川通綾小路下ル町 錢屋庄兵衛版

慈氏菩薩略修愈識念誦法 → 豊山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

地藏菩薩本願經科註六卷附地藏經科一卷附地藏菩薩本願經綸貫一卷

清釋靈棄輯

經科清釋岳玄排

日本釋淨慧訓

點 元祿三年跋京都村上平樂寺刊本 四六一四五五

【眞常「地藏菩薩本願經科注序」（句送返縱點）】

地藏菩薩本願經科注序

地藏菩薩本願經者頓脫生死之捷徑速到涅槃之津梁起死回生之良藥閉惡興善之寶鑑也乃至以信手拔疑根用戒足登樂刹慧目定心無量功德靡不具足者其唯此經歟是故地藏菩薩實爲羣生所依福田之根本也若能歸敬此菩薩者則衆苦悉除諸願滿足現在能得安隱將來必定解脱若稱洪名或歷耳根永滅重罪終至寶果是皆大士不可思議慈願力之所以致其慈山願海實過於諸大菩薩者日劫相倍矣是以釋迦世尊將人天衆囑此大士復讚之曰一彈指間歸依地藏菩薩是諸衆生卽得解脫三惡道報也原夫佛法寬廣行門無量所有諸善功德之中而以發心起願爲最要繩惟菩薩往昔作長者子及光目女時而發心起願齊修六度圓證三身恒沙功德皆悉具足故今播名十方分身沙界廣度衆生者皆因發大心起大願故故知發心卽諸願之根本一切功德莫不由是而生然而本具大願從智體起拔濟弘誓由悲用生始從發心終至成道引行趣果願爲之本是故成佛莫先於願所謂無願多退如牛無御如畫無膠如坯未火終不可用故經云比丘不發誓者終不成佛道誓願之福不可稱計得至甘露滅盡之處也予嘗深覩是經審以慈孝願行爲宗要何者以光目女有大慈愍心爲母發大願故然則慈能生孝因孝發願由願興行開則成慈孝願行合則爲慈願也頃支那國有運遐法師以自所編地藏菩薩本願經科注寄送崎陽興福悅峯師師卽運法師同省也嘗聞運師於病中而注是經凡成六卷其功豈易言哉此經自唐至今千有餘載甫有注釋之者吁亦可謂難矣是誠菩薩護念法師善願病魔既退勇猛莫超佛言勇猛名地藏然則運遐法師豈非能契佛意者歟予欲請此注梓行於世悅師諾授之予不勝喜如獲異寶今既付梓普願見者聞者知地藏菩薩本願功德利益之事則植將來之智種而且見果畏因息惡勤善遣妄歸眞仰信受持如食金剛決定不消終得佛果以此不思議尊經實爲羣生之慈澤潤物無窮逢是妙典多劫慶幸莫大於此

故不揣愚陋而爲之序 岁貞享五年歲次戊辰季春上澣吉旦 寶池釋眞常稽首敬撰 「釋氏／眞常」「寶／池」

【妙幢淨慧「跋」】（送返縱點）

跋

寶池眞常禪德偶得此科註歡喜踊躍卽欲廣流布于世不辭鯨浪犬牙之危險頓發崎陽緬赴京洛時沈疴新痊而形氣未復原然勇志奮起如此可謂爲弘法利生忘軀命矣因屬余以訓點刊行之事〈余〉素歸地藏菩薩間又讀誦此經每憾闕註疏之久也而今幸遇希有勝緣寔所謂如闇得燈如貧得寶喜感交生不知手之舞之足之蹈之只願早流行之以成常師志而普與衆共利於是不暇顧謗陋漫汚和點以鋟梓云旨元祿三庚午載十月上旬〈沙門〉妙幢〈淨慧〉謹跋

033

自知錄二卷附錄一卷 明釋祿宏輯 元祿十四年京都獅谷升蓮社刊本 六二一五三四

【忍激「合刻陰驚自知二錄跋」】（送返縱點）

合刻陰驚自知二錄跋

余曩未見太微仙君功過格又未聞有震旦僧儒盛行功過格者故雖嘗見雲棲自知錄而非不信焉而未及行焉後偶讀獨庵善哉寶訓載積德立命學始知自知錄之不可不行因自思立命一篇蓋袁氏已驗之靈訓而亦能令人信受自知錄之寶券也可不合刻共行于世哉然而不知此篇出自何書求之不得一日過獅子林問湛老和尚忻然語余曰立命之學具出於袁氏陰驚錄也袁氏豁開儒釋一貫之眼目而深達天地鬼神之際特錄自驗者乃告之予以傳於天下後世者也蓋不施教化而能令蒼生兢兢改惡行善者莫切於此是以支那僧儒競刻陰驚自知二錄家諭戶曉故三尺孺子亦能知之嘗聞日本未有此舉豈不闕典繇是昔作之序而欲刊布而未果焉出之與余看先見龍華道人二篇合刻引卽符鄙懷細讀全篇喜不自勝益信人間不可無此一錄矣遂強病點之捨資刊行於戲以此從家傳家從國傳國而俾天下人戰兢惕厲造於止惡脩善之域則匪止行此者變禍成福轉

034

天得壽亦豈容不以此日固導乎政道之小補且嚴乎來報之助業也哉 元祿辛巳二月十八日 獅子谷沙門忍澂書

【刊語】（無點）

沙門信阿捨衣鉢資合刻陰囂自知二篇廣布於世願我與衆生共極止惡修善之良心同躋了生脫死之淨域者 元祿十四年
二月十八日雒東獅子谷升蓮社識

〔鼇頭〕悉曇字記二卷 卽悉曇字記捷覽 唐釋智廣撰 日本釋周觀首書 元祿十二年林庄五郎刊本 ち〇〇二六一

—

【周觀「字記捷覽之跋」】（句送返縱點）

字記捷覽之跋

蓋法佛自證三摩提者其惟攝拖苾駄之灤門乎聲轉七九而弘攝字垂五十而經緯張詮一字一文理超泉涌無始無終我心曼
拏也懿夫妙感妙應不出一字奇哉宛焉見乎法身而已然我祖振錫於震旦傳教兮扶桑已來梵軌廣布德流八極者也至如注
信於斯道轉寫乎諸章者卽身證法如擅遊于密嚴之淨利者矣哉斗筲夙負笈於東境溫法於師所之日幸在乎講筵方閑于此
灤矣從爾歸于鄉久沈神兮幽寂境時追覽未聞者也粵二三子而訪乎予茅室曰于今欲轉寫于諸章請爲所教示者太幸焉雖
吾實非其仁辭讓則唐捐兮勝益將如之何哉于茲輒諾使書寫於梵文兼講于斯記殆暨二十有餘筵者也時子曰閱此紀言浮
意遂聊難審悉厥趣矣吾黨慨哉無比捷徑焉勢是難默而聿纂此綱骨也寔有深信者用一通多豈捷覽又勝歇者耶囑日復輕
命於求法之情再泛乎船舟凌於鯨波之難者也於時又信于殷請喉吻激揚既幾乎三十席矣因應剏劂氏之需重添削之私分
科節躬自書以壽于梓也是靡衍愚少識者抑汲流懷恩者小志也庶幾可畏忘乎筌蹄剋證其本者毗盧之身土法爾而有悉談
聲字之中仰覺之薩多豈可弗效乎哉云爾昔元祿十一歲次戊寅十二月十有二冀肥之前州稻佐山寶壽蘭若奉菩薩戒小苾

菟周觀欽識 「□／明氏」「苾菟／周觀」

035

悉曇字記一卷 坤梵字音註一卷 唐釋智廣撰 坤錄□闕名撰 天保四年跋江戸淺草覺吽院釋行智刊本 ち一二六〇一
五〇

【阿光坊行智〔跋〕】（句點）

悉曇字記之傳于本邦也尚矣憶初得之時文辭不能無錯簡及宗睿安然二師出如粗編正之而有辨其顛末焉現流之本蓋繇二師之所繕修也藏林二書所載可以觀然猶未免有紕繆也其後雖有衆家爲說造疏於記文未曾有辨其誤而訂正之者寔爲可憾余蚤讀而竊疑之是以往一雖校之而猶未能全其功爾來潭思亦有年頃稍覺有涇渭猶相混者且其如舊註雖未曾無所可取然倍記文而失正意者亦有之矣故並今刪之繩愆糾謬洒然復舊觀名曰悉曇字記正文將以頒諸同志庶幾於山陰直授之旨有識得先輩未了之意矣已 天保四年癸巳二月庚申行智識并書

悉曇字記捷覽 → 悉曇字記（日本釋周觀首書）を参照。

悉曇字母表捷覽 → 一行禪師字母表を参照。

036

十不二門指要鈔二卷 宋釋知禮述 寬文十年村上勘兵衛元信八尾甚四郎友春等刊京都平樂寺村上勘兵衛後印本 四
九一一六五

【跋】（無點）

右此版者以唐印本模寫之竟尚有寫誤者欽請來哲添削焉仍而彼奧書曰夫十不二門指要鈔者天台教觀之樞要一家學者所常耽翫然鈔與十門部秩各異講授之次尋討稍艱今以鈔文挾于本文差而書之倩人重彫印施無窮者耳

〔三籍合觀〕四分律行事鈔資持記四十二卷 宋釋元照撰 日本釋慈光分會併校點 貞享四年序刊本 四六一五二二

【肯隱元統「新刻合註四分律鈔疏序」】（送返縱點）

新刻合註四分律鈔疏序

驚王圓音也廣開雖八十千有所不盡略說名戒定慧無所不攝總是由隨機與稱性也驚嶺開權鶴林扶律不融其法而融其情蓋法妙難議情龜易局資之南山大師深詮佛意芝苑律師縷述祖懷遂令沈空偏智之徒畏戒乘之俱緩除篇聚之固執是以不升二師之堂難究一字之妙吾祖正法國師邈入汴宋傳律於如菴宏師迺得資持行宗濟緣等之諸記創布衍本朝吁三師之利世至矣哉光矣哉有慧門律師者氣宇端慤才識秀逸粵擬合刻於台謨事參鑄於律誥條科璨然大利捷覽適由律師之盛事旌吾祖之遺績爾功不可不嘉爾徵不可不塞弗顧不文云爲序引 賈貞享龍輯戊辰佛降生日 前泉涌傳法沙門肯隱統炷拜勤渠涉筆於北嶺休隱堂 「元／統」「肯／隱」

【慈光慧門「三籍合觀後序」】（句送返縱點）

三籍合觀後序

聖心平等融善惡於一軌凡情逐塵稟昇沈於六趣是以無灑之中立法無律之間制律佛滅百年律分爲五散在印土各建殊論俱餘真正法律與東方有大因緣佛陁耶舍譯出彼第一部北臺尊者講說流通自爾作疏二十有家各雖爲出群拔萃之智術未得醇全覃南山行事鈔十二卷靈芝資持記十六卷及科三卷之出開遮持犯捷徑瀏亮炳如也呼功於曇無之門者耶舍也功於

耶舍之門者南山也功於南山之門者靈芝也然而鈔記科文異部學者病於照對今茲貞享丙寅歲余與法第瑞芳覺公齊志勑力合三爲一都計四十二卷校讎數本正其訛謬傍加龢訓令人易讀顏曰三籍合觀卽命剏刪氏式布諸大方庶幾新學道侶憑斯洪範離末法之虛誕知梵學之由漸從戒門而升定堂入慧室而坐覺座也不敏等非敢望功於靈芝之門也後學比丘慈光慧

門焚盥拜書于泉之大鳥山神鳳律寺 「慈光／之印」「二字／慧門」

【慈鏡「蓮牌木記」】（無點）

佛子優婆塞慈鏡寶刹損資敬刻 三籍合觀四分律行事鈔四十二卷流行伏願依聖教以通慧性因慧性而破羣疑普與無邊界衆生同證如來第一義 貞享三龍集丙寅季秋日謹識

038

四明十義書二卷坿科一卷 宋釋知禮撰 坿錄宋釋繼忠述 元文二年京都文會堂長谷川莊右衛門等刊本 ち六一一三

—

【性慶義瑞「重刻四明十義書序」】（句點）

重刻四明十義書序

圓宗觀道曠遠深絕必須稟宗匠之開決更自精揀方善得通達焉設或不然名衲老宿尚失正路況初學後進不入邪徑殆希矣昔者慈光恩師兼講華嚴不深本教濫用他宗輒定一念爲真從是今宗境觀大壞亂矣遂使圓談法性錯爲直顯心性而廢光明玄之廣本也於是四明尊者惜乎正教慙於來蒙勉與梵天昭師問答往復各及五回今之十義書者撮彼五回之文而集大成者也一披此書非惟往復始終灼然可觀亦夫定境修觀託事附法妙解妙行唯色唯心凡觀道之晦于時者燦然明矣嗚呼因山外之邪說觀心正義翻顯昭代其猶豬揩金山風益求羅耳幸此書嘗流至此邦而尚不弘於世人無知其爲至珍也至吾立和尚屢々講演稱讚四方學人普識照觀道之光明幢也當今之時苟欲曉天台荊溪之宗教必須依憑四明指南欲解四明之文先當

沙彌十戒法并威儀經一卷 □ 闕名譯 日本密門房本初分會 明和元年高野山山本平六刊本 四六一五二六

040

法身無相舍那御珍服暨乎逗三乘之根應濁世之機如來自以丈六形著龜布僧伽梨學佛之徒靡不遵則焉洎澆代盛談心性
儀相浸遺弊魔乘便大變聖制所謂冬服綾羅夏資紗縠華蕩奢靡無不爲殊不知蠶衣之誠出於如來慈心之餘而爲世福田緒
脫劫奪難也負識高流莫不爲之痛心疾首南山章服儀於是乎作也則使有志之士知有方而所自豈謂之小補哉然斯書雖存
而後世講者鮮矣何居蓋聖制之興廢者時運之所繫也當像季際魔屬甚熾則智者亦隨衆所以雖廢亦興也至于鬪諍堅固之
運則庸昏之徒含識而已於是乎救世大士直明佛性常住之旨爲續慧命且後扶律之儀救其所急譬如見饑寒者先與之食而
後與之衣所謂爲護法故與共和光者也人多不見大士之意一飯之後將凍殺之是聖制之所以不能興也乃者省我比丘欲刻
章服儀廣布于世而併應法記自書且請以余之言弁于編首余改容而曰比丘以不肖亦爲釋氏之子乎欲不以人廢言乎吁余
之言誰取焉然而余亦蓋有所聞有所聞者非余之言亦何辭爲之叙 寛文五年乙巳之冬 岬山桑門不可思議題

039

釋門章服儀一卷 唐釋道宣述 寛文七年京都村上勘兵衛刊本 四六一五四四

【不可思議（艸山元政）「釋門章服儀序」】（送返縱點）

釋門章服儀序

精練十義指要兩訓不精於斯今宗觀道明者不也然現行義書寫誤不尠子注文字相逼難見讀者病焉今爲訂正重上梨棗更
揭忠師科於文上以代學人合寫之勞後學精讀此書勤々繩々則能解釋宗教通達觀道自在無礙譬如破竹初節既破餘節皆
去不難也學者於斯不可忽之也 賈元文丙辰七月上澣唐山比丘〈慶〉義瑞謹識 「釋印／性慶」「義／瑞」

【密門〔跋〕】（無點）

原夫沙彌十戒法威儀經者徃昔大覺慈父度尊者羅睺羅之法則卽是七衆之隨一僧戒之濫觴也上古法之盛時顯密諸宗初出家者已受十戒讀誦是經而修習威儀依之吾祖弘法大師言已受沙彌十戒習七十二威儀矣竊惟佛祖之提撕由來已尚矣學佛之者不可不仰密乘之徒不可不學然今見本朝流布沙彌威儀經恐三部合糅歟所以者何沙彌威儀式一部者亦在於樂藏中已別行焉又三部中重出戒相多之矣是故今據吾大師爲所學處而合糅於十戒法及威儀以備于吾門之所學處以授二三子云爾 寶曆龍次癸未僧自恣日 南岳真別處苾芻密門謹誌

041

十六大阿羅漢因果識見頌一卷 坤聖蹟一卷 唐闍那多迦譯 □紅雪子圖繪 寬文七年跋刊本 ち〇〇〇四—三

【夢堂支覺〔跋〕】（無點）

十六尊者偈語翻譯既尚矣宋范文正公爲序流通罪福因果以開示衆生之旨燦如日星近獲於龍藏之中遂併圖梓行冀成天下之福田發含生之智種 旣寬文七年歲次丁未孟蘭盆會日 紫陽朝日沙門夢堂覺拜跋 「支／覺」「夢／堂」

宿曜經 → 文殊師利菩薩所說宿曜經を參照。

042

首書四部錄 日本闕名輯 日本釋□□首書 元祿十一年京都永田調兵衛等刊京都菱屋亦兵衛後印本 四九一一七七
【跋（版心）】（無點）

夫斯四部錄本散在諸錄者於本邦輯爲一部而題之名益例四家語錄者歟其編集者竟莫知原於誰余看本邦梓行本往往有

語意不快者〈走〉昔游泳于江湖時獲蠹損一本繙閱之其義炳然唱嘆其持也尚矣一日恐看斯錄人披舊本差繆以千里時考典籍正事迹令之冠鼈頭遂鋟木以廣間失考正者俟後之君子云爾 旨元祿十一龍集著雍摶提格林鐘中澣日駿陽陳人 □峯叟並蹤之胡 「釋／種」「玄／□」

青頸觀自在菩薩心陀羅尼經 ↓ 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

攝大毗盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌供養方便會 ↓ 豐山勸學院藏版祕密儀軌四種を參照。

攝大毗盧遮那念誦儀軌 ↓ 豐山勸學院藏版祕密儀軌四種を參照。

043

勝鬘師子吼一乘大方便方廣經一卷 坎勝鬘寶窟三卷 劉宋求那跋陀羅譯 坎錄隋吉藏撰 寶永元年井上實氏秋閑刊本

四六一四七三

【道空「雕勝鬘寶窟敘」】（送返點）

雕勝鬘寶窟敘

原夫所謂一乘之大車者則是法王之寶輶也是以萬德珍琛以校嚴其高廣四辯鈴鐸以縣列其旁邊欄楯總持幘蓋悲捨禪綻以蓐寂枕以休華纓繩垂四來舉足歸仰之懷寶繩絞絡羣黎寧有愛見之愆儻則駢田奉崇牛則膾脾般若況夫家且富豐不偏其施乘豈窮匱無量其籌何其盛哉何其偉哉然夫蒙庶冠癡佩嬰常舞色味之宅驂疑駕惑長驅生死之原至如饗餐榮聲安寢

熱燄鏡像膠鴉身世未省漂艸爨茅其靡識火坑胡暇論寶輶於焉我法王自手擎四鉢而鹿園之教茲基訖身臥雙林而象喻之誥聿極凡鸞音興響金彩移輝皆無非憫其嚚頑悞其矇瞍者矣爾乃妙吉遍吉之諸髦翊輔其化西方東方之羣傑贊成其治以故或恩或讎皆是益物遭歎遭呵總爲施權要唯所以欲令辟癡冠決嬰佩駕大輶驅廣衢者耳茲有勝鬘夫人者後宮維蹤本地誰得而測柔淑乃質慈悲宜應爲殊若夫踰闈信至之晨虛空像現之日寄緣興教託事契機狐膽外魔忽壞蘭儀之宣吐獅吼了一向記說自非厥理之終窮誰獲其說之決定一乘也者唯一佛乘是爲真實大方便也者爲說種種是云權巧蓋夫無乘而乘乘無所乘稱之一乘無運而運運無所運卽是真運唯其無所運是以無所不運唯其無所乘是以無所不乘其非若斯妙玄指之言大方廣將以何稱之者乎但至理幽淵奉之難入茫茫歎喟譯語古簡讀者不進往往惋嗟唐初有嘉祥藏大師者胄遐方而誕秀協川嶽而稟神襲龍樹之芳猷探鷺峰之祕旨論鋒共迦旃爭銳亮軼秋蟬智囊與舍利競儲麗譬春鳥蓋是滅後荃宰法門英規者也於是歎微言之已絕傷頽風之不振抗言動論朱紫教理發意吐語涇渭指歸乃造疏若干卷顯此眞詮以洞明立言十萬餘發茲玄旨而煥炳未論深之者便開金藏卽亦繙之者眞窺寶窟庸非驚曉醉狂指眎寶輶者耶然夫請流吾邦固過萬重之濤瀾傳至今日亦經千餘之星霜華夏既已歸烏有之家桑域未曾入回祿之手雖然書寫襲祕未澤學教之乾吭精藍寶藏寧息慕古之延領矧且蒸濕恆慮蟬蝕詎防茲某夙奉此經心庶湛邃曾獲斯記懷渙層冰乃意既導或里或田何廢書肆亦聞若樹若石豈擇棗梨於是躬自不量竊企廣布屢事讎正猶恐剩魯魚之塵仍命剞劂且喜免潦鶴之瑾所冀者披奉男女同共締乎來緣攝受仁賢與俱駕乎一乘云爾 元祿十六年季冬之吉沙門道空和南敘

勝鬘寶窟 → 勝鬘師子吼一乘大方便方廣經を参照。

聖無動尊一字出生八大童子祕要法品 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種を参照。

〔鼈頭〕成唯識論十卷 闕卷第五 唐釋玄奘奉詔譯 日本釋明詮傍解 日本釋真興訓點 元祿七年京都中野宗左衛門刊本 四八—一二一（八）

【清慶「道成唯識論序」】（送返縱點）

道成唯識論序

夫唯識藏者幽邃高峻難究難至豈□言蒙可跋及哉此卽世親大士製三十頌達摩波羅等十大龍象釋述本經解八萬藏文過億言卷滿百軸遮那內證之祕牘摩訶運載之規模宗歸唯識道超羣典八關玄闢開慧識於幽途三性方軌運慈心於朽宅可謂深密不思議之法門也李唐間三藏玄奘法師糅參彼本譯成此本頗摘其領珠以陶論議之羌辭其鱗爪有叶述波之製糅譯神才編成妙巧恰如青于藍而寒于水肆義繁文約學者猶病諸幸慈恩基法師親得奘師之指麾握唯識之關捩既著疏記洞明奧扉如癢得搔又淄洲撲揚撰述燈祕告解論疏加之支那明師日東碩德各爲抄解競智鋒則此論之妙大備而無餘蘊矣然而文辭浩汗義理深玄自非老於諸匠之學者誰得通曉乎於茲音石明註者九百年前產疏吾國布化十方德色光耀稱玉華大師廣涉唯識之論藏詳探先哲之注記乃提起精要剖折繁雜夾之行間弁之行上粗分科段著明文節欲使初學遊履此論通生智解也爾後子嶋眞興兼長顯密二宗繼註師之蹟添加和點并便初學寔義道之司南闡路之夜光也因號曰道成唯識論是此蓋倣二十唯識釋論者歟又自古至今有名道論雖然以註師之道獨備龜鏡以興師之點一爲準繩也學者苟閱此論則文義易了疑惑速蕩若干疏抄了在掌中嗚呼美玉韞櫃而祕也尚矣時哉東大寺沙門地藏院主淨性公元家雜華林又遊唯識海氣宇出群學行超衆竊尋類本略正鳳風不敢加己見要壽梓請余於序余亦隨喜此論流行于世不辭腐才聊贅數字而已庶幾今世學者開惠眼後代君子富書典應理梵風起八荒唯識智日輝大千若然幽邃高峻可究而到豈可以言蒙而論哉於是序 賦元祿第
四歲在辛未臘月穀旦沙門清慶謹書興福蘭若知足丈室 「延／□」「清慶／之印」

【了空淨性「刻道成唯識論小引】（送返縱點）

刻道成唯識論小引

成唯識論乃三藏法師奘公所譯文約義繁而講演者實寡本朝貞觀間元興寺玉華大師旁摘諸疏之要爲之解題以今名嗣復興福寺真興先德爲之訓點向之所謂簡約之文浩繁之義於是乎瞭然而明矣余嘗欲令其訓解以廣流通流通廣遠則庶幾無負二師遺意也奈事不果偶與興福寺耆宿清慶公談及公曰是真佳舉也幸勿辭勞余之宿志於是益固遂謀梨棗奈傳寫經久而牴牾不一因以數通校本參互相照加蒙詳訂雖一點一畫絕無臆說或有疑於舊文則從公質之公亦不辭其數且序其卷端以明二師訓解之大意蓋以古來講演唯識南都爲盛有若二師者實傑出其間啓迪奧旨闡揚法門厥功詎不偉歟學者苟有欽其德仰其風者則知其所著訓解流通于天下誠不可緩刻成姑述其顛末如此 元祿壬申歲仲秋日 東大寺地藏院沙門淨性薰沐拜書 「了／空」「淨性／之印」

045

〔四論〕大乘五蘊論一卷大乘廣五蘊論一卷附音釋觀所緣緣論一卷無相思塵論一卷 日本釋智暉輯 五蘊論唐地婆訶羅奉詔譯 廣五蘊論觀所緣緣論唐釋玄奘奉詔譯 無相思塵論陳真諦譯 延寶七年刊安永八年再治本 四八—二八八

【智暉「校四論敘」】（無點）
校四論敘

余憂近世學者弗稽尚古競出新意教綱廢頽綜校四論授諸幼學其敘曰大聖說法有一諦瓶衣軍林者俗諦也悟於蘊處明於因果證於轉依亡於言說者眞諦也五蘊乃證眞之初校大乘五蘊論厥言約厥義豐弗假廣釋玄趣難明校廣五蘊論蘊門專譚我空通人兼知法空拘士動繫法有決彼所滯明識所變校觀所緣緣論新翻文而詳舊譯朴而深弗綜二論難辨通塞校无相思

046

塵論客有議者曰今子所爲鮮有攸益夫斯諸論艱險高遠雖耆舊而或苦其難輒施諸幼學母乃不可乎余應之曰否今夫學書者必原義獻學辭者必摸班馬苟艱險而弗躡高遠而弗闢日就於安月從於卑以至今之弊仲尼曰不順其初雖欲悔之難哉卽讀而思思而讀諄諄弗解蓋有以成矣仲尼曰溫故知新子夫莫疑客默而退乃授剖劂云 寶曆丁丑夏五月 洛西沙門智暉謹撰 弟子沙門玄韻拜書

新譯華嚴經七處九會頌釋章一卷 唐釋澄觀述 文化二年京都天王寺屋市郎兵衛刊本 四六一四三〇

【典壽「華嚴七處九會頌釋章序」】（送返點）

華嚴七處九會頌釋章序

昔者圭峯禪師有華嚴綸貫之作其書亡逸而不傳復菴綸貫本爲禪者作故雖痛快直捷而不便於學教之士嘗欲倣法華綸貫別作一書愧無旭師之筆而止客冬於華頂入信精舍得七處九會頌釋乃清涼觀大師之所著也其書僅一萬三千餘言較之疏鈔不及百之一而全經要義揭示殆盡且其文平易明白雖初學可解實爲入華嚴教海之津梁矣此固非復菴之所能辦假使旭師見之未必不歎其不可及也於是再四校訂亟付之梓以廣其傳大抵喜簡厭繁人之恒情也則斯書流通宜先疏鈔而待今乃行嗚呼物之顯晦信有時哉原本寶永甲申昇堂所寫其人好古嘗校梵網石壁疏等行之世云 文化二年乙丑五月望 沙門
典壽謹撰

047

禪關策進一卷 明釋祿宏輯 寶曆十二年龍澤釋圓慈據明曆二年刊本重刊 京都柳枝軒小川多左衛門江戸小川彦九郎
藏版 ち八三二一一二

【東嶺圓慈「重刻禪關策進後序」】（送返縱點）

重刻禪關策進後序

古人曰明窓下古教照心僧堂前坐禪弁道猶如車兩輪始可與祖意相應也大凡無照心之弁道必止小見彼二乘外道〈并〉惡知識類是也無弁道之照心悉落學解今教律神儒及祖師禪蓋不出之也是故如眞正道人以正坐禪研究根塵以眞古教精鍊定慧況至鞭策怠慢激發中止者佛祖先鑑可仰以依行矣吾闡提老翁自從幼聞泥犁苦境頻求解脱已來祈神誓佛水火不怖責身苦心寢食稍廢一朝見法華經因緣譬喻之說錯爲不足取失力三四年也十九歲復在禪叢衆寮因見岩頭和尚末後爲賊害大叫一聲聞數里外又大失志以爲現在之害尚不能轉況於泥犁耶古人秀逸者已如是則我輩何得免脫嗟呼佛法虛誕參禪無實僧也俗也我進無所期退有所羞焉於是改志放意惡見日加次年至濃之瑞雲從事馬翁與溫馬山輩結伴互論詩文一日閑坐之次翻然思曰身僧而嗜俗事志俗而預僧倫大丈夫恁麼打過亦有不保處時當晒書之節內外經籍堆在堂上翁繕往禮拜懇禱曰儒佛老莊諸家之道我以何爲師願護法天龍示我于正路閉目良久任手把着得一小冊名禪關策進頂受披之卽撞着引錐自刺章且其考記曰昔慈明在汾陽時與大愚鄉等六七人結伴參究河東苦寒衆人憚之明獨通宵坐不睡自責曰古人刻苦光明必盛大也我又何人生無益于時死不知于人於理有何益卽引錐自刺其股翁至此志氣憤激如吞醍醐遂乞求其書於馬翁常爲照心弁道之友行住相隨自是踏開岩頭醜面目根塵剥落觸著道鏡惡毒手見知喪盡年過不惑見徹驚領之藏祕齡近耳順闡揚龍峯之家私其道走殺天下衲僧其德驚動王侯士庶者皆出於他囊中所貯一箇之策進者歟是故翁常讚慈明語誠學者曰老僧少時日三復此語而不及也今老焉止哉又曰雲棲一生之文字但此書有補吾宗汝等他日功有餘力再刊行之以報祝融之恨雖然此書間以念佛參究自己是則是甚奪衲僧頴氣落往生門者不少若依老僧意一齊削去可也何故獅子不食鷹殘猛虎不食伏肉往生一機還他淨家衲僧門下實智尚不要何况假名耶驅耕夫之牛奪飢人之食始可以爲真參詳而已客歲辛巳冬參學虎上座與同友二三子効力欲補翁志便有林氏渡氏等之檀信遂捨淨財玉成其議於是請予于加數語以弁來由仍記先所親聞事實許多遠傳之不朽〈云〉寶曆十二年龍集壬午孟正日住豆之龍澤東嶺頭陀圓慈恭書

「道果／改／圓慈」「東／嶺」

尊勝佛頂脩瑜伽法軌儀 ↓ 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

た 行

048

〔鼈頭〕大慧普覺禪師宗門武庫二卷坤雪堂行和尚拾遺錄一卷 宋釋宗杲說 宋釋道謙編 元祿七年跋近江端氏刊本
四九一一五九

【潮音道海「武庫跋（版心）」】（無點）

夫罵天老人雜毒海者古今禪林點眼良藥而堪治翳眼大醫典也雖然黃吻禪者暗乎藥事泥乎病理於茲命吾西堂大石燈外
令假杜預註左傳顏籀解漢書之手一日燈得管中窺豹時見一斑請跋於老朽老朽喜彼見義勇爲因以題云爾 該元祿〈甲
戌〉年上巳日 南牧潮樵夫自題 「道海／之印」「潮／音」

049

大華嚴經畧策一卷 唐釋澄觀述 寬政七年京都丁子屋九郎右衛門據正德元年刊本重校刊 ち〇一四〇一一

【謙順「再刊華嚴畧策序」】（送返點）

再刊華嚴畧策序

大統國師嘗棲託清涼聖境著華嚴疏數百萬言文深江海義高山嶽洋洋焉巍巍焉非後世學者之所輒窺測也此畧策也省約
大疏爲四十二條綱要殆盡豈使去丈就尺謂乎於其體製始設問答終曰謹對每條皆然考之文體明辯說書格式有宋蘇軾書
三篇皆始置問對終曰謹對註家曰說書者人主好學則觀覽經史而儒臣因說其義以進之題與篇首有問對字蓋被顧問而答
之詞也此書體製與彼一則亦是被顧問而記之者耶據高僧傳國師在唐歷九宗聖世爲七帝門師驗知蒙其顧問題曰畧策抑
亦取對策之意耶此書行世既久但惜語儘脱落字多陶陰予今參訂大疏旁及他書仔仔校讎再鋟梨棗冀世之學者閱此畧策

遡彼廣疏其猶行遠必自邇登高必自卑云爾 寛政七年乙卯冬十月瑜伽宗沙門〈謙順〉謹識 「謙／順」「豐／春」

大使呪法經 ↓ 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

大乘廣五蘊論 ↓ 四論を參照。

大乘五蘊論 ↓ 四論を參照。

050

大乘法苑義林章七卷 唐釋窺基撰 日本釋道空校點 元祿十五年京都土川宇平井上忠兵衛等刊本 四八一二八二

(イ)

【道空「刻大乘法苑義林章序」】(送返點)

刻大乘法苑義林章序

間者余點大乘義林章授書林某者而令壽于梓夫所謂點者吾邦中古縕釋素儒凡讀書者皆朱點于文字之中外四邊識以成國語是之謂點如夫宋潛溪所云順文讀下復逆讀而上始爲句者皆依點而得之而已然輓近者直以國字施于字傍而以成讀而猶稱之點者蓋名且存古爾嗟乎點豈易言哉至其甚者有危乎過箋注也然世之人多以易々視之以故世之點書爲不可恨者蓋鮮有之矣在余闡儻村濟學落向使覃思豈得無復舛謬而況於草々不得不效世之易々之爲者乎伽佗有之獸歸林藪鳥歸虛空聖歸涅槃法歸分別冀世之智者善分別揀擇爲是正焉然曾聞此書別有異本存焉未得閱之憾哉又謂餘更有四義章者今之所缺脫焉豈非可惜乎然余竊爲方今此本廣流天下則其異者其缺者亦安知其不爲渥洼之龍延津之劍也或謂此

書將行于世當一序之余曰義林無容序也義林而贅之以敘譬猶序書經而贊其政事之嘉叙詩經而稱其風雅之致也可無序者也而余惟有慨者蓋蓁棘之蔽塞職由人之希行斯路也若使人駱驛于路雖無闢之蓁棘何繇得蔽焉今夫世之諸家教章其爲蓁棘者不可勝道後令學者躡足于古之章疏之正路每憧々其間則其爲蓁棘者欲無湮滅得耶若正路其行蓁棘茲湮則令世之講學駸々古人而重得瞻司疑之章其不庶幾乎嗚零安得使世藏古教章之家既無居士取金之訓亦醜中郎閟帳之齋固莫爲門戶之曲計何敢踵借癡之俚言与其藏之於家內寧藏之於天下乃不復畏無忌之猖獗不復慮盧郎之豚犢其然則亦導學者于正路而闢蓁棘于眞道焉耳所謂破邪顯正而護叔世之佛法者曷其尚諸乃今日以余之所以嘆者書之策端云爾 元
祿壬午仲冬沙門道空謹書

051

大乘法苑義林章七卷附末書目錄 唐釋窺基撰 日本釋道空校點 日本釋基辯改點 元祿十五年刊安政九年京都額田

正三郎井上忠兵衛等校修本 四八一二八二（八）

【大同坊基辯「校刻大乘法苑義林章叙」】（句點）

校刻大乘法苑義林章叙

夫採集宗要之書作者多矣印度論籍光乎法寶誰復不重秦翻有中百十二門唐譯存瑜伽顯揚對法其來既久大哉聖言誠無間然焉然文約義豐非屬支那釋家采摭大義務且善誘縣力薄才唯事於因循而止已矣蓋斯義林章也者我慈恩基法師從事大唐三藏親所決了惣持爲苑大法爲林大乘教門攝持以無遺中道妙理因備以不極色心之裁樹妙華自發棲小鳥轉忘歸種類之垣牆諸門忽關養外獸馴不去奉大乘者舍此苑林亦焉傲遊抑此章本神護景雲之初雖傳本邦久祕之南京古藏中治承兵火後建久之代興福大衆議公之炙嗜四方講學爭請大益天正亦有賊寇墳典集版半廢于火斯章亦不在也元祿之末洛西五智山有道空和上號如幻房者釋門之棟梁也以國字施點校刊大勤附并且序於不獲善本之憾焉其於屬義備閱不爲無補

矣厥功寔偉矣哉然有錯亂有脫落亦眞稟承義覽者病諸余曾於南京所傳領章本是寬喜年中校正善本所謂朱點于文字之中外四邊是之謂點者也此歲寓居於平安城客舍講演少間無事探衣囊則善本在焉因漸爲校刊補闕整錯既而見校本頗似免其字句勾棘難通之憂自謂可觀遂授書肆校刻功成吾豈敢謂章主之忠臣道空之羽翼拙智窮思刪定必有謬固取誚於博識不免爲慈恩之臯人既述稟承而不自作事其所用復何傷乎云爾 安永九年庚子孟春念三 南都西京藥師大寺留學慈恩末學沙門釋〈基辯〉撰 「三昧」「一名天／果無／非中道」「灑相正／宗沙門／基辯號／大同坊」

【大同坊基辨「凡例」】（送返縱點）

凡例

一此書道空和上向加點校刊而憾不見異本章焉今按南京七大寺流記云後白河帝時爲贈僧正藏俊發遣宋使多求珍籍其携來中異本章在〈云云〉又云現行七卷本文武帝時新羅智鳳面受章主携來我朝授行基義淵云因識此現流本爲正有脫落錯亂者傳寫之所致也異本章後人所增加也必勿憾不見焉

一現本加點悉以道空私意今所改點全仍南京相承星點使有眼人讀之了然應知義深

一首贅一重圍道空校正今所加校作兩重廓示其別已

一存道空校刊傍以彳字令知今校不奪其功讀者勿尤繁重懼難見之誚聊附數言

大同坊基辨謹識

大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

大日經 → 大毗盧遮那成佛神變加持經を參照。

052

〔鼈頭〕 大日經住心品疏科文六卷 唐釋一行記 日本闕名科文 寛文三年刊本 ち一六一一四〇

【跋】（無點）

萬治癸丑載砾於長谷寺科焉

大日經住心品疏冠註略解 → 大毗盧遮那經疏冠註略解を参照。

053

大比丘三千威儀二卷 後漢安世高譯 日本釋宏源點 江戸期刊延寶七年京都錢屋高橋忠兵衛求板印本 四六一五二
五

【宏源「刊語」】（無點）

北埜上林苑比丘 〔宏源〕 香拜點釋 三千威儀經上下卷所冀戒根清白拔除我倒佛佛不絕其化生生常會是道並見聞緇素莊嚴三業同入寶處者時大日國延寶己未春社日觀世音律寺謹識

大悲胎藏 → 豊山勸學院藏版祕密儀軌四種を参照。

大毗盧遮那經廣大儀軌 → 豊山勸學院藏版祕密儀軌四種を参照。

大毗盧遮那經疏冠註略解八卷 卽大日經住心品疏冠註略解 坤大日經住心品疏冠解玄談一卷 唐釋一行記 日本釋淨嚴略解并首書 元祿十五年前川伊兵衛等刊本 ち一六一一二五

【蓮體「後敘」（送返縱點）

後敘

夫住心品者遮那之眼肝薩埵之膽腑也苟非宿植善本神情猛利之人不能辨其句逗是故三藏詳釋禪師懸記焉然詞簡而理深文同而義別也又非師授難曉耳我弘法大師定門葉之所學製開題文次第良有以也振古撰註解者十數家軸充廣廈而初學者倦于涉獵也先師妙極正當興法利生之仁講授開導日夕不怠以故負笈者累繭輻湊或見萬指之繞會講之五回索隱探蹕折衷衆說輯爲冠註正科文加梵字清濁訓詁昭昭乎可見寔學者之手鏡者也四來之客競希流傳尚廣博而苦于繕謄各請梓行之依旂再刪繁補闕題曰略解分爲九卷務授剞劂氏印版未濟先師寂矣〈不肖〉材則啞羊技則鼴鼠雖空負瀉瓶之名無輔教之實今也不得敢辭讐校而行于世者也若夫聽善言祕策愚者亦知說之稱至德高行不肖者亦知慕之說之者衆而用之者鮮慕之者夥而行之者寡所以然者何也不能如實知也庶乎後來可畏由註以達疏由疏以通經速覺自心品普開無盡藏則曩祖之願茲滿吾師之志亦足云爾昔元祿第十五歲次壬午小春二十七日住河南藥樹山延命密寺苾芻〈蓮體〉書

大毗盧遮那成就儀軌 ↓ 豐山勸學院藏版祕密儀軌四種を參照。

大毗盧遮那成就瑜伽 ↓ 豐山勸學院藏版祕密儀軌四種を參照。

大毗盧遮那成佛神變加持經七卷坤音釋 卽大日經 唐善無畏譯 元祿六年跋釋宗覺校刊本 ち一五四一一三

【宗覺正直】〔跋〕（送返縱點）

予頃載依圖畫曼多羅之口偶居仁和寺一日洛下經師〈某甲〉新雕三部祕經齋持來求讎校焉予云不識祕經版行臧否如何阿闍梨若聽許者隨汝之需於茲請問我大阿闍梨耶前法務前大僧正孝源大和尚矣闍梨命云既有舊版矧亦斯版最好再校流布可也繇是輯於數本考訂功竟迴斯良緣施與法界頓斷三妄成無上覺旨元祿六年龍集癸酉仲秋穀日老乞士宗覺〈正直〉謹識「宗／覺」「正直／之印」

056

大毗盧遮那成佛神變加持經七卷附音釋 卽大日經 唐善無畏譯 寶永五年跋釋以範刊本 ち一五四一一一四

【以範】〔跋〕（無點）

今年之春新使刻五部祕經念焉有年于茲蓋本朝傳來已後印版幾多華竺蘊結不可勝計雖然貝葉錯亂麻面蠹殺玉軸牙籤兩何益有以是償我不給費檀主物是不燃身卽真法供於此就吾師故僧正口決協聲正平去裂眦顧訓點且梵文自書漢教他筆寄是剖劂印無相汝快剪刀一瞬千下不日功成覺有神力打紙分與無所不至以之觀之喜願易成豈求雄辯有疑手澤獨照勇銳無惑心鏡願報四恩同入阿闍 寶永第五歲次戊子曆二月吉辰小野末資權大僧都法印以範 筆者義俊長觀房

057

大毗盧遮那成佛神變加持經七卷 存卷第一 唐善無畏譯 萬治三年跋刊本 四六一三五三（イ）

【〔卷第一卷末校記〕】（無點）

以山品正運房正點之本今改之者也 萬治三年正月吉日

大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會 ↓ 豐山勸學院藏版祕密儀軌四種を參照。

大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提幢標幟普通真言藏廣大成就瑜伽 ↓ 豐山勸學院藏版祕密儀軌四種を參照。

058

大明三藏聖教目錄四卷大明續入藏諸集一卷坿北藏缺南藏函號一卷 明闕名撰 延寶六年序宇治黃檗山寶藏院鐵眼道光刊早印本 四九一九六（口）

【鐵眼道光「進新刻大藏經表」】（送返縱點）

進新刻大藏經表

五畿內山城州宇治郡黃檗山寶藏禪院傳臨濟正宗三十四世臣僧道光誠惶誠恐謹言臣聞闡演真詮良繇于釋子流通大法誠賴乎國王歷觀身毒旃丹爰考竺墳儒籍載之今昔昭若日星臣雖不敏忝廁空門瓦蓋畦衣事佛已久晨鐘夕磬奉法亦長思酬四重之恩寧斬一身之力以故不揣樗材每開講席廣招雲衆日論金文使人人熏知見之薌俾各各蒔菩提之種銷鎔夙習潛發真源既宏斯道頗愜微悰仍念本邦素稱佛地帝王重法弗亞支那況我今上皇帝太上法皇陛下迺古聖重來今佛應現慧華爛絢福海洪深扶持宗教坱圠咸知旌獎緇徒恩輝非一旦紺宇琳宮在在恢廓金軀梵相處處輝煌但所乏者大藏之版耳計此藏版支那有二十餘副獨本邦未備非國家之闕典歟嘗聞垂棘之璧屈產之乘豐城之劍赤水之珠皆至寶也然衆寶之中法寶爲最其可遺乎法寶所在則諸天歡喜萬靈擁護吉祥中吉祥殊勝中殊勝者也臣乃夙夜京京不遑安處思欲經營匪同瑣屑矧乎縣力不翅蚤負於是入則禱于龍天出則告於檀信自微至著緣淺及深叨蒙法力不爽所懷茲將告成理合上進藉斯殊勝之因仰祝無疆之算金枝永茂玉葉長榮天下昇平雨暘時若伏望陛下天地之量頫鑒臣僧葵藿之志萬機之暇乞賜披繙法門幸甚臣僧幸甚欽惟陛下至察至明如同日月惟仁惟德奚異唐虞非古聖今佛應現于世焉能致是哉此臣所以孳孳而弗敢已者

蓋欲上報佛祖之鴻恩陰翊陛下之至治也臣千冒天威下情無任激切屏營之至謹奉經隨表上進以聞 臣僧道光誠惶誠恐謹言 延寶戊午六年七月十七日上表

【鐵眼道光「刻大藏緣起疏文」】（送返縱點）

刻大藏緣起疏文

蓋聞摩騰入漢五部之金文始至玄奘回唐三藏之聖教斯彰揭慧日於中天開羣生之覺路由是尋文翻譯者碩德聖師輩出竭衷向化者鉅卿偉士咸依宜其廣扇慈風於當代周施法雨於寰中者也然自六朝以迨唐宋元明大法流行莫盛乎中夏海內大藏經板不下二十餘副或存禁中或鎮名山如星分碁布在在有之吾邦古稱佛國自欽明天皇之世教始東被至于列聖相承存神眷注宰臣士庶率土崇奉合而觀之不遜身毒支那諸域獨大藏之板向未有刊行於世者殊爲闕典每與山林多士譚及莫不爲憾予也生當像季幸廁僧倫竊叨佛天覆蔭常切法藏流通一念萌之胸次蓋有年矣奈時緣弗遇徒有其願不能爲力是夏入洛禮謁黃檗和尚啓告是事蒙和尚喏然讚許予亦喜之弗勝姑捐衣鉢之資與二三好善君子共之先請藏中最關要者數函梓行亦猶積土成山積水成河之意庶幾異日有見賢思齊者樂然雲從圓成全藏未可知也嘗憶大明神廟年間紫柏大師念大藏卷帙繁多致遐方窮邑有終不聞法名字者故易梵本爲方冊以便流傳普使見聞作金剛種子遂倡緣於三吳之間命道開法本二神足董其役而太宰五臺陸公司成夢禎馮公方伯彥先吳公等聞之大加讚美各願歲捐俸祿以助不數年間竟竣其事迄今附舶而來者卽其本也夫五臺諸公尤稱儒林柱礎現身宰官而念法之深獨肯堅勇若是矧吾邦王臣士庶世代崇尚三寶列土宗廟皆爲菩提道場豈樂善重法之誠不及唐國諸賢特向來無人爲之倡起者蓋亦緣之有待耳今予忝爲前茅伏願十方宰官長者善男信女各各生難遭想發廣大心或助三幽五幽或資一言半偈普結般若之緣成此殊勝之事俾法輪常轉永祚邦基則予生生報佛之恩獲少酬爾 旨寬文九稔歲次己酉孟秋佛歡喜日 肥後州沙門鐵眼道光和南謹撰

大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋一卷 坤般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧眞實金剛菩薩等一十七聖
 大曼荼羅義述一卷 唐不空奉詔譯 坤錄唐阿目伎金剛撰 慶安元年住友市十良重政校刊 實曆十四年京都額田正三
 郎校修本 坤錄安永二年跋釋弘道校刊 四六一一二〇

【重政「大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋跋」】（無點）

平安城東山大佛於智積院加點令校合者也 慶安元曆寒呂日 重政

【「大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋跋」】（送返點）

寶曆十四甲申孟夏下浣再於智積院以東福寺之藏本校合之冠書以示異且處々改訓點畢

【弘道「般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧眞實金剛菩薩等一十七聖大曼荼羅義述跋」】（無點）

此書有舊刊然非無魯魚誤仍集數本考訂旁注國字而重鐫之以附釋經後願以此功德與衆成佛道 安永二癸巳復五月

瑜伽沙門弘道

大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋一卷 唐不空奉詔譯 日本闕名校點 寬永十五年刊本 ち一六一六
 一二

【住友市十良重政「跋」】（無點）

平安城東山大佛於智積院加點 令校合者也 五條坊門上柳町住友市十良 重政 戊寅 寬永拾五天大族吉旦

大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋一卷 唐不空奉詔譯 日本闕名校點 寬文二年跋京都書林高橋清兵

衛刊本 ち一六一六一六

【高橋清兵衛「跋」】（無點）

斯書雖先有板行舛誤頗多矣因討三家之讐而以重壽梓焉冀斷自佗之業綱增幽顯之口福矣 寛文二龍集壬寅六月穀日
書林洛阳 〈四條寺町〉 高橋清兵衛

底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種を参照。

062

〔鼈頭〕鎮州臨濟慧照禪師語錄一卷 唐釋義玄說 唐釋慧然集 日本釋大智首書 元祿十二年京都書林刊京都松栢堂出雲寺文治郎後印本 四九一一六一

【實統大智「林際錄增補鰲頭跋」】（送返縱點）

林際錄增補鰲頭跋

吾宗無語句亦無一法與人是故世尊於四拾九年間橫說豎說而道未曾說一字列祖一千七百陳爛葛藤那涉言詮不見道若稱揚大事直是開口不得無你措足處此謂之不立文字豈有一點一畫相拘語句之有無哉若如此見則千言萬句覓其元字脚竟不可得此謂之文字般若予所以溫權輿於無根字林究闡奧於沒應句海聚類纂要系此鰲頭好事者屢來請付剞劂用廣其傳予嘉其志與之倘遇明眼觀之敢保噴飯滿案 旨元祿拾二年龍集己卯仲槐吉旦 海西沙門統大智謹跋於洛陽城南寓舍 〔寶登／大智」「實統／之印〕

天台四教儀一卷 高麗釋諦觀錄 延寶四年京都中村五兵衛刊本 四八—五一（イ）

【日峯〔跋〕】（無點）

天台四教儀者實出世之大意也從夫故篋放光六百餘載焉盛傳於西東大發初學之昏矇也余俛焉耽讀有年矣第恨舊本多差誤句讀或難成乃暨攷諸玉岡糾諸神智衍文闕字蓋不亦少豈唯折析之類哉仍叨弄刀筆以備自照矣一日閱市而索書偶得是書唐刻也昔者孤山圓師考刊行世儻其贅膏殘芳乎於是又取舊本更互校讎聿俾工鏤版庶乎幼學啓蒙之一助云爾承應甲午秋八月沙門日峯書焉

天台四教儀一卷 高麗釋諦觀錄 嘉永四年江戸和泉屋庄次郎據元祿六年刊本重刊 四八—五一（ト）

【慧澄〔跋〕】（送返點）

高麗四教儀僅三十餘紙撮教門綱要取觀道領袖無一句剩語非深達意者誰能爲是著作也本宗之稚雛入學之初以諳誦此書爲業龍門三級高成盛功其基在焉是以教風所及隨而流布舊板磨滅初學艱句逗頃日山衆偕議改刻之以便童蒙習讀刻成乞〈余〉記其由因識之卷尾云 嘉永四年辛亥夏 東叡淨名比丘慧澄 「傳燈／比丘」「慧／澂」

天台四教儀科解三卷 高麗釋諦觀記 宋釋從儀集解 日本釋亮憲會 日本釋寂阿校 元祿六年京都三木太郎右衛門據寛文九年跋校刊本重校刊 ち六一一二一四（2）

【獨師師蠻〔跋〕】（無點）

四教儀集解者觀師撰之神智記之卷盈乎三帙義包於一藏洋洋焉浩々焉不迷諸部之言不誣而已慶長年中三井沙門亮憲

僧正採記文而按本書之下以便于後學也爾來印本之行于世者久矣然而文字之脫落科文之化謬不能無憾焉屬者播陽班鳩之僧寂阿於京師考異本焉問諸老焉正其科焉完其字焉又改其訓點焉重鏤版而使贊者披雲霧矣梓成就余請跋之余嘉其善而於是乎書 寬文己酉孟夏之朔獨師師蠻把筆於洛東東西軒

066

傳佛心印記註二卷 元釋懷則記 明釋傳燈注 清釋靈耀校 元祿十年京都長谷川市郎兵衛據康熙十九年釋靈耀校刊

本重刊 ち六一一二一八

【亮潤大雲「重刊傳佛心印記註引」】(句點)

重刊傳佛心印記註引

爰自佛法東被震旦諸賢盛爲宣揚據經依論立宗非一而的傳佛祖心印紹隆大法正統者惟吾天台一宗耳第時運下衰哲人長往禪宗華嚴之徒橫議于外異端曲見之士蔓延於內正傳心印遂晦而不明賴有元初虎溪興教大師者出深悟圓宗力守祖業著書數于言命爲天台傳佛心印記焉而其爲書也揭性惡之談點理毒之致甄卽離於毫芒辨圓別于隱微明佗宗異端之似是而非顯天台圓家之獨得真傳可謂巨夜之大明燈也嘗吾玆立和尚大中興此道而深知佗宗異端爲害之甚故每講此書以授學人於是此書盛行而註解間出然或醜陋苟瑣或訛謬乖違無得作者本旨者〈余〉頃於大藏中得無盡大師所著註而讀之則消釋詳悉理致深切大發作者意但有一二不穩者乃全璧之微瑕耳豈妨爲重寶哉於是乎卑諸劂生梓而流通云時元祿丁丑冬十月天台山東溪沙門〈亮潤〉大雲謹識 「亮潤／之印」「大／雲」

067

東國高僧傳十卷壇聖德太子傳一卷 清釋性澈撰 貞享五年跋京都茨木方淑刊本 ち〇〇四七一一

【泊如運敞「東國高僧傳序」】（句送返縱點）

東國高僧傳序

竊惟眞空無象貌而義天星辰森羅至道離言思而教海波濶浩渺弗藉筌蹄奚得魚兔弗以鈎勒安御象馬法之所以爲寶也。然法不自弘弘必由人僧之所以爲寶也。如從上顯密諸師求法遺骸弘道輕命礪慧靖念律身攝生稱百世之師模爲萬古之明鑑者皆其人也。繇是騰蘭踰葱巔梵風扇動乎華國灌藏跨碧海佛日照耀乎桑洲聖賢挺生鸞鳳接翼代不乏人矣。奈吾國僧風樸略自大法東被以來七百有餘載未有僧史膺元應皇帝撫運之日慧山虎關國師撰元亨釋書三十卷此乃釋門史傳之權輿也。自是三百又餘霜而嗣音者復寡可不謂闕典與粵有支那國高翁禪師嘗承隱元老和尚之命遊此方居無何赴奧州法雲之請及董攝之佛日近歲卓錫伏陽天王山開剎佛國伽藍宴坐其中王侯歸崇雲水依附化權鼎盛健搥續響歸然成一方之望刹翁稟嶽瀆之粹氣長文物之城中魁岸出群神情鑑徹匪翊禪熟詩熟抑亦富張華之博識包董狐之良能嘗閱釋書而歎此編未行於支那支那人不知此方有如是隋珠趙璧因茲採摘釋書并諸零篇續脩僧傳二部一曰扶桑禪林僧寶傳勒爲十卷先已鏤梓行世一曰東國高僧傳亦十卷將與前傳並行然而釋書不問皂白男女有係釋門者盡編入焉今則不然單取方袍故題以高僧純教門之魁也其叙事理筆削之宜所謂辯而不華質而不俚其文直其事核者乎然釋書之後所登載者甚少矣慮漏網之夥姑置而不出之自元亨之後豈無智行淵懿光前耀後者乎世所聞知有英聲而失英跡者幾許人乎奈無斷簡片牘可供採摭嗚呼教家者流蔑置雕蟲之弊至此徒流汗悚骨惕於中耳屬日翁之上首晦岩心宗二師過而索予序予應曰某與乃翁蘭契年久理須善諾奚敢佗辭然予天分無文加以老耄斷無意緒將何言哉而二師力索不已乃握管勉書而應云昔貞享四年龍舍丁卯初秋之日瑞應山休隱老比丘泊如運敞端肅書于寂照堂「泊／如」「運敞／之印」

【「編高僧傳成志喜」】（送返點）

編高僧傳成志喜

國中自昔多僧寶或在嵒阿或道場德重旨皆伏鬼魅名高往往動侯王夜途爲作代明炬霧海還成濟溺航今假文辭脩作史千

秋萬古定流芳

【茨木方淑「刊語」】（無點）

京兆白衣弟子茨木氏方淑發心刻此東國高僧傳十卷伏願人人熏知見之香各各登聖賢之位高張教綱大扇玄風陰翊皇綱普資物類吉祥如意者 貞享五〈戊辰〉年吉月吉旦 弟子方淑謹識

仁王護國般若波羅密多經二卷 唐不空奉詔譯 寬文十二年錢屋常喜刊本 四六一四六二（イ）

【跋】（無點）

唐譯仁王般若經刊布于世者年尚矣余嘗讀誦而知間有魯魚之誤矣因竊校訂且繫以青龍之科判兼加僂點及四聲清濁唯備自己之持誦何望他人之披覽偶知己者閱而謂曰善哉此本文句無差分科有序請鏤諸版以傳遐方使諷讀者得解義之便若爾勸持之功豈其虛耶於茲卒爾諾而式命印生刊行焉然尚可否容易難決頗俟來哲之筆削云 寬文壬子應鐘日 求法沙門〈某〉誌

佛說仁王護國般若波羅蜜經疏三卷增仁王經疏科文一卷 隋釋智顥撰 清釋道需會 日本釋亮潤校 正德三年中野五

良左衛門刊本 四六一四六七

【亮潤大雲「鑽仁王般若經合疏叙」】（無點）

鑽仁王般若經合疏叙

仁王般若疏安史之亂橫罹兵燹中原經其傳至宋初四明祖師多方求之卒不克獲嘗傳于吾扶桑師授相傳而講究亦聞豈此疏與吾邦特有因緣邪特吾邦之士信道之篤守而弗失歟然經疏各行艱乎尋對且亥豕相屆句讀難分邇世以來疏本僅傳而講究稍疎想非斯之故歟 〈余〉嘗竊欲分會校訂以便學者而事緣爲阻未酬素志頃日廄生持一方冊題曰仁王般若合疏者來請〈余〉弁言焉〈余〉取覽之則闕爲霖霈公之所合而訂正稍精嗚呼〈余〉嘗所欲爲而未果者既經先達之表章豈惜

鄙辭而不表隨喜之优哉於是乎書 元祿壬午春二月下浣 天台山亮潤大雲序

「僧／潤」「眞／詣」

入唐四家請來錄 ↓ 豐山藏版祕密儀軌六十二種を参照。

070

佛說如意虛空藏菩薩陀羅尼經一卷 北魏菩提留支奉詔譯 寶永三年跋校刊本

ち〇一五〇—六

【跋】（無點）

虛空藏菩薩經從來流布版本謬誤不少間以善知識之校本假名改正壽于梓者也

寶永三丙戌歲五月吉旦

八字文殊軌 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種・大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法を参照。

071

〔鼈頭〕般若波羅密多心經註解一卷 明釋宗泐釋如玘奉詔同撰 日本全唯一寶首書 元祿四年跋據洪武十一年跋刊
本重刊 四六一五〇五

【全唯一寶「跋」】（無點）

夫般若心經者諸佛薩埵心法而大部般若精要也雖行少一十曲理統恒沙而汪洋矣古今諸家明哲推義窮理注釋之揮毫盡善矣盡美也於中今註解者禪教兩家宗匠宗泐如玘二大老恭蒙敕集天下諸師於天界而所研究之者故義富理豐無一途偏執之解余嘗見本邦流布印本間有不快者故遑々求其正不得終懷嫌疑年于此矣一旦幸然閱藏中唐本卽寫而後與彼流布印本校讎之脫差贅行粲然可見不任抃躍強探枯腸加私考判科冠鼈鏡梓以欲令正本擴充私考休咎敢不足論庶幾唯依本註之訂正勿據舊本之錯衍 命元祿四歲次重光協治陽月下浣 參廣澤沙門正法後學唯一寶謹跋 「全唯一寶」「一寶」

寶

072

般若波羅蜜多心經幽贊二卷坵同異 唐釋窺基撰 日本釋智暉校 寶曆三年京都額田正三郎據寛文八年刊本重校刊
四六一四六九（イ）

【智暉「重鋟般若心經幽贊敘」】（句點）

重鋟般若心經幽贊敘

竊以嘯度大乘也要唯二種而已矣曰中觀曰瑜伽從漢至唐混然未分蓋致鬻乳加水之誚邪及奘師西復梵本東傳也如披雲霧而視青天然矣基公爲其高足才運清雋遊刃聖文婉轉究盡極爲精巧以爲如來說教體一眞如既猶天鼓應念發聲亦類末尼如求雨寶依憑此經述其二宗令依學者庶幾得其環中也曩者托木布諸遐邇奈何一旦羅災半爲烏有今茲書肆圖再鋟而請校訂乃詳魚魯施環讀矣夫基公學窮三車著縱百本嚴肅法將天使猶避卽預瞻覩心形戰慄竟不敢語今焉序其書校其書非清涼師所謂遐方終古皆若面會者孰能之雖然糞壤生稻穀濕泥出菌苔苟有人讀之疏滯爾心罔象爾懷者我不辭其爲鑿粉云 寶曆壬申九月 京兆西阜沙門〈智暉〉撰 「金剛／頂宗」「智暉／之印」

般若波羅蜜多理趣經大安樂不空三昧真實金剛菩薩等一十七聖大曼茶羅義述 → 大樂金剛不空真實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋を參照。

白傘蓋大佛頂大道場念誦法要 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種・白傘蓋大佛頂王威勝無比大威德金剛無礙大道場陀羅尼念誦法要を參照。

073

百千頌大集經地藏菩薩請問法身讚一卷增音釋 唐不空奉詔譯 元祿十五年京都西村太衛門刊本 四六一一五五

【惠傳「奧書」】（無點）

〈本云〉 慶長十九年六月二日醍醐松橋殿御本寫之 惠傳 〔六十二〕

【尊宜 〔奧書〕】（無點）

明暦元 〔乙未〕 年十二月廿三日於智積教院寫之了 上品蓮臺寺 尊宜

【慶宜 〔奧書〕】（無點）

延寶丙辰年九月廿七日於洛東智積教院月軒書寫之 六波羅蜜寺普門院 慶宜

074

佛說百喻經二卷 齊求那毗地觀譯 正保二年跋校刊本 ち〇一一〇一一

【〔跋〕】（無點）

右世流布印本者刊誤繁多也今以一本校正之畢 時正保二 〔乙酉〕 年初春吉辰

毗盧遮那五字眞言修習儀軌 → 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

075

〔豐山勸學院藏版〕 祕密儀軌四種 四六一六〇（口）

攝大毗盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌供養方便會二卷 卽攝大毗盧遮那念誦儀

軌 唐輸婆迦羅奉詔譯 正德元年跋江戸靈運寺釋慧光據慈覺大師請來本校刊

【慧光 〔跋〕】（送返縱點）

攝大軌一部三卷是慈覺智證宗睿三師之請來也但其本非無異而今所印刻者則慈覺大師本展轉傳寫舛錯頗多故以

本經及廣大軌校定有其未決猥冠注之以俟後哲或爲防慢法曹間有其亂脫文則就師承傍點示之併是要法寶久往耳
旨正德元年辛卯之夏武城靈雲寺沙門慧光識

大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏悲生曼荼羅廣大成就儀軌供養方便會二卷 卽大毗盧遮那成就儀軌 唐釋法

全撰集 正德元年跋江戶靈雲寺釋慧光校刊本

【慧光〔跋〕】（送返點）

大毗盧遮那成就儀軌二卷法全阿闍梨住玄法寺而所撰集故呼曰玄法寺儀軌此慈覺大師之請來也舊本五言偈頌一行四句是古來調經本之通法也然今所梓行則一行三句是由閒有脚注其句難分而已又其所讎正皆以冠注之庶乎後賢爲再正之旨正德元年龍集辛卯仲秋念有三日靈雲道場沙門慧光欽識

大毗盧遮那成佛神變加持經蓮華胎藏菩提幢標幟普通真言藏廣大成就瑜伽三卷 卽大毗盧遮那成就瑜伽 唐釋法
全集 日本釋慧光訓注 正德二年跋江戶靈雲寺釋慧光校刊本

【慧光〔跋〕】（送返點）

大毗盧遮那成就瑜伽三卷法全阿闍梨住青龍寺而所撰集故呼曰青龍寺儀軌此慈覺智證宗睿三師之請來也但今所錄未決是孰師本若依安然錄曰睿與前本同但以有注爲異則宗睿之本也若依一切奉教金剛言中注法那法那句而曰此四个字珍依經加是智證之本也又五言偈頌舊本一行四句而今改爲一行三句意如玄軌記又其讎校而有未定則冠注之以俟後賢旨正德二年星紀壬辰孟夏二十有一日武城靈雲寺沙門慧光識

大毗盧遮那經廣大儀軌三卷 卽大悲胎藏 唐善無畏譯 正德元年跋江戶靈雲寺釋慧光刊本

【慧光「跋」】（送返縱點）

大毗盧遮那廣大儀軌三卷善無畏三藏譯此宗睿僧正之請來也今所刻本似未治定而無異本可以校者但如安然遮梨及法三御子等所引用文亦全同之於是決知元來未正之儀軌也故今點之間存兩訓或又爲防慢法之曹往往亂脫卽點師傳以指示之諸餘讎正冠注其頭而俟後哲冀爲正之旨正德元年辛卯八朔靈雲精舍沙門慧光欽識

豐山藏版祕密儀軌六十二種 四六一六〇

大聖妙吉祥菩薩祕密八字陀羅尼修行曼荼羅次第儀軌法一卷 卽八字文殊軌 唐菩提仙譯 享保十七年跋奈良豐山長谷寺妙音院釋無等校刊本

【無等本寂「跋」】（無點）

八字文殊軌十八契印二部二卷以武府靈雲開山淨嚴和尚之點本讎校鋟梓旨享保歲次壬子季冬之穀和州豐山妙音輪下沙門無等欽識

尊勝佛頂脩瑜伽法軌儀二卷 唐善無畏譯 享保二十年跋奈良豐山長谷寺釋無等校刊本

【無等本寂「跋」】（無點）

尊勝佛頂瑜伽法軌儀二卷無畏三藏譯慈覺圓行慧運之請來也而今所錄未決是孰師本但以靈雲淨嚴大苾芻之校本及別本而校閱之然傳寫異同不少故猥冠注之後賢猶質之耳 享保紀乙卯春三月十五日豐山長谷輪下無等誌

藥師瑠璃光如來消災除難念誦儀軌一卷 坤藥師如來念誦儀軌一卷 唐釋一行譯 藥師如來念誦儀軌唐不空奉詔譯

享保十九年跋奈良豐山長谷寺釋無等據靈雲寺釋淨嚴校本校刊

【無等本寂〔跋〕】（無點）

藥師瑠璃光如來消災除難念誦儀軌一部一行阿闍梨撰東大寺裔然弟子祚壹之所請也而今所刻者靈雲開山淨嚴和尚之校本所希壽諸梓以布普天九橫宏難一時消四大沈疴剎那除旨享保星舍甲寅臘月吉日和州長谷輪下沙門無等謹識

觀自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生薰真如法一卷 卽觀自在妙香印法 唐不空譯 享保二十年跋奈良豐山長谷寺妙音院釋無等據釋淨嚴點本校刊

【無等本寂〔跋〕】（無點）

享保龍集乙卯仲夏之穀以淨嚴和尚之點本將讐校之壽梓而以香煙輝真如 ハリヒ 「キリーグ」 雲覆刹塵 大和長谷妙音院輪下沙門無等誌

聖無動尊一字出生八大童子祕要法品一卷 □大興善寺翻經院述 享保二十年跋奈良豐山長谷寺釋無等校刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

享保二十龍飛乙卯清明念八日竊點師傳刊行焉而無異本可以校者則以其未正冠書之以備後人之取捨冀爲訂之日域豐山長谷輪下桑門無等識

建立曼荼羅護摩儀軌一卷 唐法全撰 元文二年跋奈良豐山長谷寺釋無等校刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

此軌法全 *ācarya* 「阿闍梨」集 *homa* 「護摩」之要路矣是慈覺大師之請來〈祕錄云仁錄外〉也然轉寫而誤多今校所欠以壽于梓負識賢者庶更正之維時元文星舍強圉大荒落季夏之日炎旱異常恰如處甑晝講 *siddham* 「悉曇」夜事校閱祇是爲法乾乾而已豈山長谷輪下無等識

慈氏菩薩略修愈識念誦法二卷 唐善無畏譯 元文五年跋奈良豐山長谷寺妙音院釋無等校刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

一本奧云大中九年九月七日珍記又於同時檢勘之珍記〈少疑不少〉八家錄云行運圓覺加本然今所校刻之本奧載智證大師檢勘之記以之見此則智證所請來本乎詳今以淨嚴和上點本及異本挑燈讐校之鍥布普天而以期珊瑚殿上之嘉會耳昔元文五上章涇灘十二月朔旦 豐山妙音輪下沙門無等

白傘蓋大佛頂王威勝無比大威德金剛無礙大道場陀羅尼念誦法要一卷 卽白傘蓋大佛頂大道場念誦法要 □闕名
譯 延享元年跋奈良豐山長谷寺釋無等校刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

旨延享元星舍闕逢困敦暮秋十日讐校之壽梓焉 大和長谷輪下 *vajrayāna* 「金剛乘」無等誌

毗盧遮那五字真言修習儀軌一卷 唐不空奉詔譯 延享元年跋奈良豐山長谷寺釋無等校刊本

【藤原常香〔跋〕】（無點）

延享改元夏用亾弟僧尊隆遺財而刻是軌以遂其宿志伏祈法乳永潤法界云 藤原常香謹誌

【無等本寂〔跋〕】（無點）

延享元甲子秋八月念二豐山無等讐校焉

底哩二昧耶不動尊聖者念誦祕密法三卷 唐不空奉詔譯 延享三年跋奈良豐山長谷寺釋無等校刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

延享二丙寅年秋七月再校了同臘月上旬雕刻成 豐山長谷輪下無等誌

青頸觀自在菩薩心陀羅尼經一卷 唐不空奉詔注 寬延二年跋釋無等校刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

昔寬延二秋七月穀旦此經校讎之轉寫不少希後賢 又運二師請來 未一決也 vajra 「金剛」乘無等

金剛頂瑜伽青頸大悲王觀自在念誦儀軌一卷 唐金剛智奉詔譯 寬延二年跋釋無等校刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

昔寬延二己巳年七月月中旬一校了後哲得善本以質而令盡美矣 vajra 「金剛」乘無等

阿吒婆拘鬼神大將上佛陀羅尼經一卷坤阿吒薄拘付囑咒 卽阿吒婆拘咒經 梁闕名譯 寶曆二年跋釋無等刊本

【無等本寂〔跋〕】（無點）

昔寶曆二星舍壬申十二月穀所彫刻之本曉珍二師請來乎所憾者未得正本之故展轉寫謬不能質焉希後賢糾之
vajrayāna 「金剛乘」無等誌

入唐四家請來錄 日本釋無等輯 寶曆四年跋釋無等刊本

【無等本寂「雕入唐四家請來錄敘」】（送返縱點）

雕入唐四家請來錄敘

欽稽曩婆伽梵龍飛虎變首出庶物品彙咸寧既而俯察群類厥性本一而情將異是故流生死而忘反著虛妄而不捨於是乎於無名相中作名相而說苟能復厥性於名相乎何有哉譬若空拳以誑誘於孺子也厥或呱呱之泣既止則開拳舒手豈有物耶噫十二詭經八萬法藏者亥大聖握空拳以誑誘迷徒之孺子歟然卽道無勝劣辭有儉易若乃厥辭簡易其義明白使若曹尋厥言得厥門而入不俟終日者眞言祕密乘法門經也斯迺濟渡之船筏巨夜之日月焉仲尼曰人能弘道乍興乍廢由人也往昔入唐求法之龍象不乏厥人就中稱八家者是厥秀也蓋東寺五家及台嶽之三家是各不顧遠涉勞疲過萬重之濤瀾請流吾神域大搃法鼓盛唱眞乘自非古佛乘願駁而來疇克致是耶然將來之經錄隩匱久矣世代寢邈而將失其傳焉粵吾大師請來錄也者往正安之間南嶺慶賢既壽于梓矣若夫台宗三師總錄也元祿中西湖獨朗亦刊之焉厥餘四家請來記也未曾有鋟版流布之者也弗能無遺憾焉〈余〉嘗獲厥四錄而匣韞之於篋匱已有年矣今也不耐於續芳千載之思揭起乎先哲幽光之績將附剞厥氏與前錄並行於世以傳諸遐代是則爲佛法紹隆之夙志永世不朽之良策也所冀者披矚縕素同共締乎來緣遍灑平等之法雨早登阿字之寶閣云爾 寶曆第四龍集甲戌孟夏之吉辰 金剛佛
子本寂 〈無等〉 謹識

大使呪法經一卷 唐菩提流支譯 寶曆四年跋刊本

【跋】（無點）

此本未再治歟又後生展轉寫誤乎佗日考正本而質之耳

旨寶曆四甲戌秋夷則中浣

077

佛果圓悟禪師碧巖錄十卷 宋釋重顯頌古 宋釋克勤評唱 安政六年華園玉桃菴釋玄彙重刊本 ち八二一〇一一

【萬寧玄彙「碧巖集跋（版心）」】（送返點）

碧巖集行于世者數版卷套多々到上學徒盛笈非便也故〈予〉欲成小字縮行省紙冊有年所矣安政丁巳秋篤信檀士戮力捨財喜資上木卽命剞劂氏事既竣焉喜捨刊梓製本賤價固〈予〉初志也若夫碧巖曲節先哲序跋善美盡々〈予〉何言乎簡省刻成故書詹言於策端爾 安政六年歲在己未秋七月初吉敕住華園玉桃菴主萬寧玄彙敬識 「釋氏／玄彙」「萬寧」濃國秋水源微百拜謹書 「秋／水」

078

佛光圓滿常照國師語錄十卷 宋釋祖元語 日本釋德溫等編 享保十一年江戸釋自穩等刊本 七九一一七二一

【乾巖元雄「勅謚佛光圓滿常照國師三會語錄序」】（句點）

勅謚佛光圓滿常照國師三會語錄序

佛于鷲峰祖于熊嶽孔聖于魯孟賢于鄒千古萬國家說戶曉其道日新日々燭也何哉德其所德道其所道也宋元之間有師諱祖元字子元號無學誕室有靈異幼而岐嶷也辟盤棄翫具取竺墳既長體於祖意食於禪悅三登九到一觸烏豆毒氣脫體換骨賈太傅剗請住台之真如包笠輻湊名冠諸方跨朗籠基超雲邁印聲教遠暨扶桑平將軍以幣聘之師幡然應請何以平之幣聘爲哉萬里山海爲法跋涉也越土庶歸崇百川朝海龍象景仰泰山北斗董巨福雄席開圓覺伽藍具超宗越格正眼提烹佛燈祖鉗鎗三玄戈甲一喝雷霆應機接物如鐘在扣似谷應響玄德升聞高達難聽滅後勅謚佛光禪師又貞治帝加賜徽號稱圓滿常照國師福鹿二會語錄其徒鏤梓行于世然有脫簡間有烏焉法孫前住鹿山義海宣老東嶽岱老峻道隆老及闡衆胥議欲補其闕畧加以眞如錄命剞劂子流芳千載一日隆老攜來乞序予曰師道也天地覆載不盡師德也日月照臨不及如其履踐有靈石

用潛及僕斯之采錄何添一辭况又一大藏教拭不淨故紙祖師言句敲門瓦礫也既是故紙何累綗帙既是瓦礫豈勞剏哉又恐後代兒孫認指作月泥句沈言于時几上毛穎子脫帽突出曰箇老漢恁麼執拗作什麼釋氏既諱說慶喜集大成大慧一炬丙之張氏復板行等是徹底老婆也儻會得此意匪啻今日爲國師擴充顧孫念子之心千萬古之下千箇萬箇俱正續於國師之徽猷而三老緝熙于先緒之功亦顯著于奕世以之爲序 享保十一龍輯柔兆敦牂季春初三日 前住豆福次住瑞龍見左街僧錄司金地比丘乾嵒元雄 「左街／鑒義」「元／雄」「乾／巖」歲丙午春三月二十又七日 東都抱闕老人廣澤勝〈知慎〉公謹父謄寫 「細／音（慎）」「字膝／樣奇」

【碩隆等〔跋〕】（無點）

敕謚佛光圓滿常照國師三會語錄舊版湮蝕無由窺覲後昆憾之尚於是乎遠孫〈碩隆〉小子〈自穩〉數載起願募緣四衆將重鏤以傳不朽也圓覺闔衆輿議憑正續塔院之藏本而參校訂正補漏去重加點壽梓伏冀佛光增輝常照大千沙界覺華現瑞榮耀萬年道場 享保十一年歲次丙午中夏初三日

東堂 昌宣 是岱 法蘭 碩隆

西堂 周幹 昌韶 等謹識

〔鼇頭〕佛祖三經指南三卷 淸釋道需述 日本釋秀石首書 貞享二年刊弘化三年京都五車樓菱屋孫兵衛印本 四六

一五〇四

【秀石「跋」】（送返縱點）

跋

有客肅然謂余曰子之親今年七十子亦得以僧體而親侍焉子何不祝之而行檀波羅蜜耶余曰吾貧窮布施難客曰嗟乎固哉

子之言也夫布施有二種焉財施也法施也蓋財施者如飲食衣服田宅六畜奴婢珍寶一切已之所有資身之具屬他爲他財物者是也法施者如從諸佛及善知識說聞世間出世間善法若從經論中聞若自以觀行故知以清淨心爲人演說者是也子之所謂施施其財施非吾所謂施也吾所謂施云者指夫法施言之吾聞禪家有佛祖三經者大都少高遠廣博之譚皆日用切近之誨不過防浮情誠邪業而軌之於正道是學佛之初門而迪蒙之寶訓也而其註釋雖有所謂林禪師之指南者然而其語多出入於諸典之中非淺智之所可得而知也願予考是經中事實而使吾得其法施焉余於是不獲固辭頓忘不敏黽勉從事凡晦朔屢更而考艸就乃施與客以賀慈母之希齡矣至其闕漏之不詳則暫俟來哲云天和元年中冬望前乞士秀石堅敬書於衣笠之隱窟

080

〔鼇頭〕佛遺教經論疏節要二卷 宋釋淨源撰 明釋祿宏補註 日本釋卽中首書 延寶六年跋京都村上勘兵衛刊京都
永田長左衛門後印本 四六一四九六（口）

【卽中〔跋〕】（無點）

此經疏釋卽世可見者有數本也於中當叶論旨便初學者蓋節要矣其餘撮畧於彼大旨不殊是以偏於節要加科解標註以補
講習冀流通盡來際與衆報佛恩延寶戊午歲夏首佛生日阿陽卽中謹跋

081

普遍光明清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼一卷 唐不空譯 寶曆十年跋京都玉泉堂經師伊兵衛據醍醐
寺遍智院傳鈔釋成賢本刊 ち一五三三一一二①

【性善洞泉〔跋〕】（無點）

此陀羅尼者醍醐寺遍智院僧正成賢自毫高祖以來師資密繕寫傳之雖鏤梓在憚與世流布本梵文有增減清濁有差異因茲

忘固陋雕刻以流將來矣 戒壇長官兼真言院住 寶曆庚辰孟冬朔苾芻洞泉性善〈八十五歲〉謹書

082

普遍光明清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼經二卷 唐不空奉詔譯 延寶七年序河州釋淨嚴刊本 四六
一二五九

【淨嚴「刻大隨求及大愛陀羅尼經小引」】（送返縱點）

刻大隨求及大愛陀羅尼經小引

大隨求陀羅尼也則一切如來光網中之所說諸佛賢聖所加護之神咒也是故字々光輝爍破癡暗句々理趣窮極性境纔聞之則一切罪業冰銷常帶之則無量障難塵碎所有威力如經所說讚北鹽飽船商等由來篤實奉佛信法聞茲勝德欣慕渴仰各捨家貲雕鐫于梓以備危厄且廣流通亦寫大愛陀羅尼經附在厥尾在昔金剛智三藏自竺入華路歷南溟暴飈析柁巨濤襄陵萬害輻湊百憂交集於是三藏手持金剛杵口誦大隨求纔竟一遍風浪立息速得至岸同濟大舶三十餘隻不識所在〈出金剛頂義訣等〉良惟度海之中風厄最急發淨信心持此神呪於彼船師所益不少況復蠲苦消殃護家安族息除煩惱往詣樂邦山毫地墨豈能所錄有意智者勉旃乎哉若欲持誦之者必先訪阿闍梨人漫荼羅殷勤請受而后修念其或不然則越法殃大阿鼻在邇豈不慎乎予自少小頗志密教受讀斯典且喜且躍嘉彼淨業尚此白善是乃不念僭踰漫書厥端皆延寶第七星紀己未臘月之吉密林樸樹淨嚴欽書

「方外／隱士」「密流／覺彥」

083

寶藏論一卷 後秦釋僧肇著 延寶四年跋中村五郎右衛門刊本 四八一一八七

【〔跋〕】（無點）

67

寶藏論一卷抽寫肥陽嘉府蓮生之藏中新命梓流世冀閱者悉以爲自家之宝藏也已矣 延寶丙辰之歲六月之日 長安僑居弟子雲衲敬誌

084

菩薩戒經一卷 卽梵網經菩薩戒 姚秦鳩摩羅什譯 日本釋連常釋慧嚴校 弘化三年三緣山增上寺據天保三年初刊十五年重刊本重刊 ち〇二五〇一六

【連常・慧嚴〔校記〕】（無點）

承貢首功譽大僧正之命而以三大藏本〈并〉現流諸本校訂焉 緣山北溪沙門

初刻 天保三年歲次壬辰臘月二十有三日 〈連常／慧嚴〉謹校

再刻 天保十五年甲辰七月二十有六日

再刻 弘化三年丙午八月

085

菩薩戒經義疏二卷均音釋 隋釋智顥說 隋釋灌頂記 日本釋激隱會本 貞享元年跋刊元祿三年修本 ち〇二五〇一

一〇

【唯忍子慈山「菩薩戒經義疏會本序」】（句點）

菩薩戒經義疏會本序

余友隱公會此經疏余一覽已乃讚歎曰字不譌句不碎有益于物蓋莫大焉然此義疏荊谿不解之於前四明不釋之於後故無鈔記足可全依如是則但會經疏不亦宜乎隱公聞之請以題端因而筆記云爾 貞享甲子臘月下旬台宗比丘唯忍子敘

【激隱 「跋」】（無點）

跋

天台戒疏行于世者尚矣但以經疏別行舛脫頗多令講者少學者病焉余頃不揣不敏稽之古本規之藏本遂會之經付剞劂氏命以流通此蓋以我亦曾病也庶幾圓頓戒光因茲復朗者于時貞享甲子臘八之日師子谷激隱書

086

菩薩戒本宗要一卷 新羅釋太賢撰 日本釋白龍配科 元祿八年跋京都村上勘兵衛刊本 四六一五二四

【白龍「科圖菩薩戒本宗要」】（送返縱點）

科圖菩薩戒本宗要〈并引〉

見行科本由來最久然用意不悉我曹憾焉項年貧衲得興正菩薩正本矣病睡餘暇拜讀校讎自手配科圖於文額終應□請再壽于梓庶幾布遐邇焉流龍華焉 維昔元祿八年七月佛歡喜日焚香更咒 上來功勳 貢祝三寶 諸天八部 善神王等住持佛法 衛國護人 普會衆生 同歸蓮邦 泉陽大鳥山 乞士白龍 稽類和南

087

法華新註 → 妙法蓮華經科註を参照。

法華大意一卷 唐釋湛然述 日本闕名訓點 明曆四年中野五郎右衛門刊本 ち〇一三〇一五

【跋】（無點）

明曆丁酉初秋十七謹點譯焉竊謂語辭不類失祖筆力統紀典志亦無此目眞虛贊虛具眼擇之若見若聞互爲善識相助解行

088

法華文句科解十卷

唐釋湛然述

□闕名科解

〔寃永中中野是誰〕刊本 四三—五〇

【亮憲〔跋〕】（無點）

凡厥顯揚佛教非智無以廣其文崇闡精微非聖莫能定其旨矣蓋眞如極理者諸法之玄宗法性眞際者衆經之輶轄也綜括弘遠奧懷遐深溫之不究其源履之靡測其底焉然隋朝有智者大師者撰三部釋以爲宗之太本自他高德聰明叡智獨步河淮獲智者號矣玄者于心與妙名乎事被法稱故釋曰幽玄深奧止者以寂爲能德依照倍觀明故歎曰前代未聞敢非所識餘宗焉粵此疏者舊師分節經文人情蘭菊各擅其美然而河憑江瑤末代尤煩光雲轉細重霧翳於大清北齊鸞細科煙颺雜礪塵飛廬龍玄暢迷三段與二門光雲從印受經爲二十四段與今大同小異智者破曰諸解重疊玉屑非寶矣書云剗絲盈匱不可織爲倚綾玉屑滿匣不可琢爲珪璋〈云云〉幸得師美玉豈不成器寶耶唐湛然以尤綜縷爲龍鳳科文以金石堅爲玉碧註解翰林續紛則曳顧珙流例句義繚亂則加周孔儒詞故知奇世之珍貴乎爰吾國東關之野上有柳澤之實然者當宗之眉壽法門之領袖也得玄止之科本兩部既書就矣看之或闕於本文科釋讓上科文惑之引證或略於註解分文退下章段病之看讀〈予〉修斯疏三本全備無減一點一畫號曰三部科解冀冥感垂加被貶後葉墨字經塵劫流龍華耳旣慶長乙巳之冬黃鐘冬至日釋亮憲謹誌

【眞慶〔跋〕】（無點）

聞說此三大部者高祖傳教大師泛漫漫西溟以於煙霞撥于異域踰嶮艱難以於本願遂于銀地謁邃滿之師論教法於蒼生矣師既應智者之懸識稟妙樂備文末學豈不握翫哉因茲往昔於當山雖有此印板凭亂劇燒失爰〈小僧〉慨彼板斷絕將刊之良梓之日聆有此科解未乎世流布三本克整開後學易入之徑路歸難解難入之直道矣試閱之本末之間欠分文科釋句略

章段列次詞肆集和漢兩朝之摺本芟繁去謬校正歸一釐爲六拾餘軸統八八數彰世出世之極伏乞功不浪施流來際福不唐捐趣佛乘云爾于時肇慶長重光奮若秋卒旆蒙荒落之冬而已延曆寺東塔院東谷沙門釋真慶欽啓

梵語千字文一卷坤梵語千字文譯注一卷梵唐消息一卷 唐釋義淨撰 譯注日本釋敬光撰 安永二年京都額田正三郎刊本 ち〇〇二六一三

【寂明「梵語千字文舊刻序」】（送返縱點）

梵語千字文舊刻序（附凡例五則）

錦囊玉函曾藏寶冊矣梵語千字文斯其目也曩哲傳言義淨三藏之所撰也然舊籍之中援文才存全書久隱昔在東武偶摸一本而出敗笥蠹簡之餘未能全矣頃年遊洛幸得衆本禪餘考訂粗復正策夐博達梵闇之異聞大洗蕩聖經之滯疑襲重祕惜獨展眉矣顧其撰者之訓人汎愛之所及而吾焉廋哉於是強繙函囊從事彫鏤云時享保丁未之春建寅之望瑜伽乘沙門寂明書於洛東僑居

凡例 ※ 「梵」は、梵字。

一此書一名梵唐千字文安然錄載云慈覺大師之請來今探數本參互考定而未無謬也披覽君子幸得好本再質正之
一梵唐對儻音韻賒切或不得正考之衆本而無可據則置而不改縱有經軌明文而不據彼削此其意可知耳

一諸本有異遽難決者間點示之揭之冠首又傍附國字力惠幼學耳

一和州法隆寺藏中天貝葉二片般若心經及尊勝陀羅尼也末出悉曇十四音今此中梵字形容彼貝葉而與當世書家之蹟互濫難辨隨世焉耳如彼貝葉齒音第二作「梵」形脣音第二作「梵」喉音第二作「梵」第四作「梵」及摩多中第四点作「梵」第七作「梵」別摩多「梵」作「梵」者雖異例無濫自餘少異披而可見焉

一今此書也四字成句一齊押韻而數寫數誤文字出沒布置錯亂校之數帙而無可序矧其以唐對梵何詳其趣縱使興嗣次韻
豈能併訂二國之語意乎

【藕峯敬光】（序）（句點）

千文一書題曰義淨撰識者非無疑蓋依全真唐梵文字而製之託名淨師者也然有益于初學既已不少偽也真也何亦須言故
更附譯注云爾 安永癸巳初冬望日 沙彌敬光書 「藕／峯」「敬／光」

梵網經菩薩戒 → 菩薩戒經・梵網經盧舍那佛說菩薩心地法門品を參照。

090

梵網經盧舍那佛說菩薩心地法門品一卷 卽梵網經菩薩戒 姚秦鳩摩羅什譯 寬永十八年跋一圓常爾刊本 ち〇一五
○一五

【一圓常爾】（跋）（無點）

此經鏤版 普利群生 頓開心地 共登覺城 奉寄附檳尾平等心王院常住 寬永十八曆二月望日施主一圓常爾

091

翻譯名義集七卷 坤蘇州景德寺普潤大師行業記一卷 元釋法雲編 坤錄元釋普洽記 寬永五年跋刊本 四三一七五

【（跋）】（無點）

夫翻譯名義集者姑蘇景德寺普潤大師法雲之所編也此書來于此國也蓋于茲有年矣以故往往鋟梓而傳于世亦尚矣粵有
唐本以之點檢已廣之本則多有脫簡者是故考訂而補其闕略也又傍加僂點者其點不一準請於處處之學校而寫之者也定

知有是處亦有非處仰而俟明者之添削也聊命工壽木以廣其傳焉維

時寬永五戊辰仲冬上旬

092

妙法蓮華經科註八卷 卽法華新註 明釋一如撰 日本釋淨嚴首書 元祿三年跋京都村上平樂寺刊本 四六一四四三

(口)

【淨嚴】(送返縱點)

惟斯經者是大雄釋尊出于世間之本懷一切衆生直至道場之要路也此故深智博達猶已難之而況淺見寡識所能解哉〈貧道〉誠雖不肖因他逼請已講之三薄搜記鈔以加其首今同志人將寫而行勢不獲已再校閱之以付梓人冀也后之覽者加之訂詳實爲大幸豈貞享五歲次戊辰秋七月布灑星直日 河南教興苾芻〈淨嚴〉欽誌

【「重刻妙經新註凡例」】(送返縱點)

重刻妙經新註凡例

一此書舊版翻刻大明印本霞谷妙子加倭訓于其側妙子也者厥行至潔厥孝至盡厥學至淵博皆無不有典據寔命世之達人也故今寫之以壽于梓

一所舉經文妙子瞻慈覺大師之倭訓以點印本是亦万世之標的也讀者知之一明朝印本不克無紕謬一如集註亦非不遺漏膚見所及今補正之

一如因緣等四釋則是一家釋義之綱領衆教通亘之大要也一如原本無有一段具足之者于註斯典尤爲疎遠雖然無奈澆末學徒並皆樂略而不欣廣此故自經初如是至住處成就具存四釋以爲準繩希也廣略折中不違欣樂不失經旨不負祖意矣一如方便品題下十雙權實及四句權實是亦今經一部之眼目佛化一代之統要夫徐氏註猶列十雙之名今一如註奚爲失墜誠爲多恨仍今詳之

一譬論已下諸品題下四釋一如原本具略不齊故今足而使詳或冠註詳之欲使一品之意昭晰在目而已

一本朝古來講法華者咸依徐氏科註而彼註則慨倫師註印版絕廢而不得已爲之者也引疏粗略不足爲賢〈貧道〉爲之大息故其三編之講咸依一如厥后倫師舊註旭公會義並行于世科註就事會義就理兩本相兼盡善盡美雖先輩之所珍如後生之獸廣是故今亦行斯本也

一天台誦法澤山前錄徐氏所加今亦加行

一澤山所排諸品起盡之圖於始學者良爲捷徑今亦加刻

一冠註所援内外典籍印版既多難知何本故別記其幾行幾字以便校讐

【不可思議（妙子元政）「妙法蓮華經新註叙」】（句送返縱點）

妙法蓮華經新註叙〈大分七段〉

法華之王諸經也孩提之童亦能言之至於說其所以爲王則雖大才宏智亦弗能也其故何也蓋法華者佛乘也佛乘者佛知見也佛知見者佛境界也以凡智說佛境界宜乎弗能也震旦諸師釋之者數十家惟天台大師爲得其說大師者靈山同聞衆而所謂降德爲如來所使者也夫得其說不亦宜乎大師之後採摘其疏者亦多惟若一如新註則略而取之引而伸之於其折中頗得宜當矣一如號一庵明永樂中爲僧錄司住上天竺嘗奉勅探討大藏撰三藏法數我應永之間奉使來于本朝時與津絕海遊和應制三山詩其人品可知耳余嘗得新註一本把玩不已自惜不與人俱遂弗顧固陋竊訓其傍授剏彌氏夫一心之妙散而爲語言結而爲文字語言及文字祇是一心之妙焉耳矣上機乃神而解之下根乃信而入之但如中智與愚者則覺知而分別之若夫神解與信入者不取語言文字之相直聞經文亦可領焉至乎覺知分別者非疏愈惑非訓難導倘或尋之文義偶發一句解生一念信而染其神則其利益不可量是吾流通之志也旨寬文丁未季秋之穀僧不可思議書於霞谷蘭若之西庵　　「妙子／之印」「不可／思議」

093

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品一卷 姚秦鳩摩羅什譯長行 隋闍那崛多譯重頌 慶安三年京都大悲山圓通禪寺尼文英
據宣德八年范福奇刊本重刊 ち〇一三〇一三四

【尼文英「刊語」】（無點）

大日本國山城州平安城北大悲山圓通禪寺願主尼文英捐資奉刻這觀世音菩薩普門品出相之經用置常住伏願憑此勝利
法界群生同證圓通 慶安第三庚寅歲佛成道日尼文英敬誌

094

妙法蓮華經入疏七卷 隋釋智顥疏并記 宋釋道威入疏 元祿十一年淺野久兵衛重惟刊本 ち〇一三〇一四 (イ)

【光謙「刻法華入疏序」】（句點）

刻法華入疏序

妙法華經一切諸經之父而通經之家天台獨得其宗天台兒孫節取其疏註於經文者古今凡五家矣宋四明威師入疏柯山倫
師科註元習善徐居士科註明上天竺寺如師科註古吳濬益旭師會義是也世盛傳倫師以下四書而不知有威師入疏乙亥之
春余開講文句於台麓會有書氏持入疏來質梓刻於余余喜而讀之其節錄疏記之要不似四書之略或易其文或移其語使讀
者易解誠大有益於初學焉嗚呼斯書本成乎四書之先而今行乎四書之後所謂顯晦有時者乎遂書以卑之書氏刻於其端
旨元祿丁丑九月下浣沙門光謙謹撰

無相思塵論 → 四論を參照。

明州天童山覺和尚偈頌 → 宏智禪師偈頌を参照。

095

文殊師利菩薩所說宿曜經二卷 卽文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶時日善惡宿曜經 唐不空奉詔譯 享保二十一年序高野山經師八左衛門刊本 四六一一三四（イ）

【覺勝「新刊古本宿曜經叙」】（送返縱點）

新刊古本宿曜經叙

宿曜經者大聖文殊師利菩薩所說也唐時三藏大廣智阿闍梨傳之東夏翻爲漢本譯場筆受瑤景二公更加注解從爾而來累世傳密諸師指誨溫習以爲祕要夫星曆推步之學創之梵王傳之淨志世人尚用之堅執以爲惑在我佛法中則宜所不貴矣然而大聖亦說觀星宿擇時日之法何也蓋論内外道別世出世者在沙地觀心非其事跡也苟執其迹以致迷則金口正說化成魔外妄見得其意善用之則世間工巧術數無一而不佛法矣豈得惡其迹之類外執而廢斯妙道至如夫翻邪歸正之人多是聰明有智會學韋陀祠典習伎藝明處推步曆術其所諳練若見法事時分舛謬恐致障礙便生疑惑言惣持智惠者無所不達而今觀之尚不能擇好星善時况餘深事乎由此疑師疑法招罪尤口且夫種々世諦皆是法界標幟如是有宿曜卽是解脫門大善知識由是觀之簡擇時日非唯順彼情機以世諦卽第一義而法事與時義契合本尊爲作加持得離諸障也菩提心嘉會之辰者其此之謂歟瑜伽行者不可不知也所言時日有曜宿曜宿有上中下性剛柔躁靜不同法事亦宜相順其擇日法本出梵方然梵曆多違家々異說吉凶矛盾世人無所適從大聖說此經指示其迷方使人不疑趨避之違也其傳本朝有四家予所覽凡五本文字異同不能均一又校之大明高麗藏本增有出沒蓋本國相傳者不過展轉書寫之謬至大明高麗兩本則恐是臆斷添竄經誥易置口位大乖聖旨不亦悲乎如月宿傍通曆推步之捷法占候之急務而一宿失位則諸宿皆差矣正月朔本是至今以虛配朔每月三十日遇小盡之時次第而直若大盡則一宿重直兩日今皆一齊以次配屬其差不止一二宿是以推占之人臨卷罔然既不通

於推占則不得不棄之就他曆遂使此書爲不用之具豈不可惜哉夫味其事讀其書々非不是而讀者自迷此與趙括讀父書何異况讀其書不知其非致迷益甚予嘆之尚矣去秋檢閱南山無量壽院經藏祕藉搜得此一本冊樣字樣殊不類當時流行本以甲子推之殆五百年而上物也比之諸本爲最古矣竊疑斯是嘗傳寫吾大師請來之本者也芟才遇哉之至之不堪遂乃梓行傳之永世庶古真本之流不湮滅云爾昔享保二十一年仲春日沙門覺勝寓於和州柴水山吉祥寺書

【補入記】（送返縱點）

太唐元和元年歲次丙戌正月二日丁卯是密日也此則日本國延曆廿五年也是年五月改元爲大同元年也又大唐元和元年十二月月小盡也（本國曆爲大月）又大同二年正月三日壬辰又蜜日准擬大唐曆正月四日應當是蜜日也又大同三年二月七日又是蜜日也

高野山無量壽院藏中別有宿曜經發光院亦有一本兩古本末皆附載此記案是我大師錄當時兩三年直曜爲未解彼筹曜章者開其端緒者也故今補入之

文殊師利菩薩及諸仙所說吉凶時日善惡宿曜經 → 文殊師利菩薩所說宿曜經を參照。

藥師瑠璃光如來消災除難念誦儀軌 ↓ 豐山藏版祕密儀軌六十二種を參照。

096

藥師瑠璃光如來本願功德經直解一卷 坤梵文神呪一卷 清釋靈耀撰 貞享三年序京都長尾平兵衛刊本 四六一一六一

【慧堅戒山「刻藥師經直解敘」】（句送返縱點）

刻藥師經直解敘

淨名云以一切衆生病是故我病若一切衆生病滅則我病滅大哉菩薩哀憫衆生之深慈何其至也藥師本願功德經者脫病鍵之神方活慧命之祕訣曩者我佛遊化廣嚴城訶妙吉祥之請宣明斯典逗像末之機宜自從三藏譯傳以降蕩々乎衣被天下緣合時熟聞持頗衆蓋以聖經簡易功德難大也近載有浙江古清涼沙門靈耀者消息乎止觀之場婆娑於篇籍之園以無言々作無解々科釋是經目曰直解文光燦然自有貫斗牛之氣余因將諸家之疏反復披閱而知耀公之釋別出手眼聿輒不自揆挑點其傍付諸梓生永傳於世也夫一切衆生抱三障之錮疾受六道之輪回不知幾經劫數青帝寶佛徹困婆心乃乘十二願輪隨緣赴感無不治之猗歟古佛慈悲之方超出上池之水也遠矣爭奈人心薄劣且無遠識其祈求也動惟以長壽富饒爲念擔麻棄金寔堪慨嘆安知且遂三界之倒願漸次誘引嘉謀而旨歸皆本甚深行處而來於戲苟得其本則末自治苟失其本徒干長壽富饒等事豈不昧醫王度生本願之意也哉 貞享丙寅三年孟秋望旦 湖東安養律寺比丘慧堅戒山合十譏 「慧堅／之印」

「戒／山」

097

遺教經論住法記不分卷 宋釋元照述 天和三年跋田中庄兵衛刊本 ち〇三一〇一一

【伯英祖泰「跋」】（無點）

古云化制互陳戒定齊舉莫大乎遺教經焉推微解釋開誘行業莫深於馬鳴論矣踈理義趣決擇章句莫明于大智記也誰不遵奉然所行世科與記不接經論言亘兩端起盡易惑（余）染指之次繫科於文前入記於論間終成一帙聊助檢閱之費功兼校讐古本訂正烏焉遂命剞劂氏傳諸不朽云爾昔天和癸亥二月望雒北沙門伯英祖泰謹誌

098

唯識三十頌略釋一卷 唐釋窺基述 享保二十一年刊京都永田調兵衛後印本 四八一一七二

【僧訓「序」】（無點）

唯識三十頌略釋（并序）

享保乙卯嘗寓于古刹之南堂而形影屏息矣東武香林之義北公亦肉壁立寄迹閑藏不來之來而起譚空室也予曾讀諸家之章疏徒躡顯密之幽蹟文擊大節義得意地雖非吾嚮往而物至照矣□愧往哲古鏡舊臨始譚唯識三十頌畧以慈恩大師之疏皆此譜記之思念向臨頌計較耳而附筆墨備具見聞章疏無所披覽其或相違乎然惟此一旨之譚柄而非望披尋之膠柱也享保丙辰二月僧訓敘略

099

唯識二十論一卷坤唯識二十論述記二卷 唐釋玄奘奉詔譯 述記唐釋窺基撰 日本釋實養訓點 日本釋基辨校 元祿十五年刊明和五年京都殿爲八大坂松村九兵衛等修本 四八一一二七（八）

【大同房基辨「校刻二十唯識論述記叙」】（句點）

校刻二十唯識論述記叙

大乘法相之載籍極多非考信於古則何得辨其眞乎蓋此論疏理豐文約學大乘法相之爲要昭々也摧破邪山以列于十支滌除玄覽雜出是於論疏章記之間雖末學膚受皆知其爲要也然近來坊間之疏本先有比丘實養者自勤剔抉以公于世作序以憾善本之難得而是正之不盡焉其本之爲形也義旨缺謬起于魚魯渾淆文辭齷牙誇于國訓繁鄙脫落錯亂文理不屬毫釐乖爽或謬大義非只一條難具陳述然則雖知此疏之爲要至于不可知何物之爲其要也余住南京研覈信於古墳之日校諸三本刪整譌舛綴補紕闕如字有異從三本最善者三本同闕義意難通者就疏主之作例考之私補之兩可難裁者傍贅以俟後來間雜長語或爲末學攬入導注者所小加剪截既顧先本孟浪居半殆至不可辨也余以爲無錯本先行而遺憾情則我豈敢發校讐之志乎所以此本精訂之功實養專當也非余也今存古刻傍加讐對意在于斯矣考訂已成最爲善本遂使讀此疏而不知何物之爲要者辨爲要之眞焉世俗之君子有言曰不朽者文不昧者心幸有古文之不朽以識之不昧而今所校刊不得不爲疏主雪冤退復以爲寡學拙智雖窮尋思刪補若有誤則爲疏主之辜人乎庶幾後進之士詳而靡尤云爾 明和第四歲次丁亥仲秋既望 東大寺西室 傳法相宗沙門釋基辨撰 「心如工畫師」「灑相正／宗沙門／基辯號／大同房」

100

唯識二十論一卷
唯識二十論述記二卷
唐釋玄奘奉詔譯
述記唐釋窺基撰
日本釋實養訓點
日本釋基辨校
元祿十五年京都井上實氏等刊本 四八一一二七（二）

【長與實養「刻唯識二十論述記序」】（送返縱點）

刻唯識二十論述記序

夫習唯識教觀之徒多望義海汪洋不測其津涯何但讀三十論不講二十論也世親大士尋作二十頌釋提挈性相綱維瓶斥外小迷謬矣傳支那之日經覺愛家依奘公三譯方言大備焉慈恩基師面在奘公輪下親受指麾以製述記發其宦奧洪勳至矣盡

矣然盛傳三十論疏不知有二十論疏所謂顯晦有時乎一旦得諸古刹藏中不堪隨喜之至將加點校以公于世第惜書誤甚多
得此失彼雖間可是正而不能盡傍附圈點者罄依之四方君子倘能得善本幸正陶而陰亥而豕之謬云 告元祿壬午二月上
浣仙府龍寶比丘實養題於洛之智積星校舍 「長與／之印」「實／養」

101

瑜伽師地論釋一卷附錄一卷壻音釋壻慧琳音義附錄一卷 唐釋玄奘奉詔譯 日本釋普明校點 安永九年京都池田屋七

兵衛等刊本 四八一二七八（1）

【寶月普明「刻瑜伽師地論釋序」】（無點）

刻瑜伽師地論釋序

北印度境鉢伐多國論師慎那弗多羅唐云最勝子道超二乘學第三藏遠稟彌勒近踵護法乃患瑜伽難可讀誦遂作釋論以爲
讚揚於是師資重華喻之日月並照本支雜彩猶如星辰錯行大矣哉固難得而名也李唐三藏玄奘法師以永徽九年二月一日
於慈恩寺翻經院譯出一卷三藏自謂若具譯之應五百卷總合本釋有六百許嗟夫此土之薄福何遭彼論之闕文雖望五百如
不存然五分之理亦無遺譬如浴海一波諸河悉觸嘗鼎一燭衆味具存是以欲學瑜伽者必自斯論始焉吾友加州明公風範慷慨
邈然懷拔萃之志近者校閱斯論且爲句讀將以布諸大方也於是余叙其緣而寓刊勒起法寶流通爲佛事之意云爾 安永
庚子六月朔西海寶月書于京兆高倉寮 「釋印／寶月」「字余／普明」

【宣明「跋」】（無點）

安永八年己亥五月書寫明本訂以麗本且附音義諸錄所載刊勒既成收之經藏

加賀州 釋宣明識

102

〔鼈頭〕六合釋一卷 唐釋窺基撰 元祿十三年中野宗左衛門刊本 四九一二九

【神光「六合釋題辭」】（送返縱點）

六合釋題辭

元祿丙子夏隨學南都藥師寺沙門高範擬講之日偶閱義林章誠神理幽邃方讀總料簡殆得此靈文一言三復寧可止哉遂揮管城爲我寫去者也矣然從寬文來有六離合釋法式畧解者布在世間此卽明智旭尊者之述作也人多講說不可舉而數者乎文也義也泊究於其喉衿者可謂盡美矣然今開此靈文觀彼畧解惜哉未盡善也至如彼云單一字名卽非六釋或云主勝士劣者何如以備將來之攸忘乎可悲白璧微瑕矣諸德解釋多同萬益惟有基大師之撰指麾前哲規摸來顯大凡作釋濫觴簡義相濫義既一義奚用六合如言虛空雖有二字共名離障何成持業故謂諸法但有二義以上爲名者卽當此釋也如此至義非一二三豈可得而說焉乎〈予〉志學歲始自聽習滿益畧解迷此六釋有年于茲矣日者漸復涉臘相家墳典文義條然祕蹟未分鴻疑日深春霧難散此蓋慣六合不精明故也幸今懇懃三祈協殷望熟吟味此靈文卓犖諸家照爛文義豈徒可韞櫨而爲我哉於是耕筆形說以讚弘致冀使初學簡義相濫也 詣龍集己卯元祿十二春王正月前布薩日寓武陽量阜釋〈神光〉欽序

103

〔鼈頭〕六離合釋法式通關一卷 明釋明昱撰 日本釋宥範首書 寶永元年小林六兵衛刊本 ち〇〇二六一一六

【宥範「六釋法式通關冠註序」】（送返點）

六釋法式通關冠註序

殺三磨婆釋也者自玄奘西遊方傳此土諸法相師莫不舉解三藏名句鬱由斯式故爲相宗八要之一此非惟習相宗之要而學建一密者亦豈外諸哉所以我弘法大師及清涼觀師等卽以此釋簡義之相濫者往々在焉去歲癸未之夏曠大藏之日偶閱斯通關廻瞻去至其通釋關隘者詞義無礙痛快醇至眞後學之奇珍也顧始涉之徒於六釋名義窒礙亦不少矣乃者不顧猥拙傍附國字訓點冠贅叢脞臆說以勒梨予之孤陋僻解頗多矣庶通鑒之士詳而正焉 賀永元年龍集甲申孟夏上澣之吉東奧圓通沙門宥範書於洛東智積寓館 「矛仙／弟子／宥範」「英存／印章」

104

律相感通傳一卷 坤重刻感通傳異本校訂一卷 唐釋道宣撰 坤錄日本釋慈元撰 享保三年跋京都中野小左衛門刊本
四六一五四七（口）

【湛堂慧淑「重刻律相感通傳序」】（送返縱點）

重刻律相感通傳序

唐終南山澈照大師兼通三藏而精於毘尼親承曇無德宗橫弘暨揚天下釋氏之徒不失僧伽之所以爲僧伽猶之春行大地萬物咸被其澤而其弘揚依開顯扶談之意令諸學者域心於圓極之乘聖僧賓頭盧嘗爲現身以佛滅已來弘律第一稱之豈不爾耶爲其持戒殊勝戒光直透天宮感得諸天神將常來護衛供以天饌因凡事可質者一一舉之天神隨問隨答大師錄其有談戒律之相者以爲一卷律相感通傳是也是傳傳於本邦尚矣惜其印本未免有魚魯之謬近有僧高淳元者得諸本對校將欲重梓行之來謁予序昔大慧禪師常讀是傳往往以傳中事自奉示人蓋追仰大師也今或有不信是傳輒生誣謗者所謂欲踰日月多見其不知量也是傳之行固不俟予言但佳元好學萌志于扶宗故爲言之其讀是傳者庶幾有增尊信矣 賦享保戊戌歲三月既望日河南龍山沙門慧淑敬撰 「淑／印」「湛／堂」

【慈元「跋」】（送返點）

「淑／印」「湛／堂」

右校訂四本以示其異雖竭愚誠尚恐有所漏然皆鑒取捨於四本考援引于諸典無敢以臆斷妄改易者矣至舊刻字畫僞誤而今歸正則不錄也讀者須知 該享保三歲次戊戌春三月望日金峰後學沙門慈元敬識

105

楞伽阿跋多羅寶經義疏四卷 明釋智旭撰 寬政元年序刊本 ち〇一七〇一一三三（2）

【大雲林說「楞伽經義疏序」】（送返點）

楞伽經義疏序

吾少林鼻祖得可大師以心傳心矣又曰惟楞伽四卷可以印心亦用付汝是知教外未嘗爲外教內未嘗爲內苟曰禪必用楞伽非也苟曰禪何用楞伽非也五派七家建立宗乘種々施設名句與夫五法三自性八識二無我之旨寧不一其揆乎然叢林振古未聞必用此經人誦家講何歟本覺國師有言曹溪能公聞金剛經契悟爾來金剛興而此經衰矣余竊以爲不然也大抵楞伽爲文幽深艱澁不可輒解參玄之士必要研明非尋行數墨積以歲月不能也則與夫兀々體究單々透徹者不免岐而爲二故姑舍是者非耶雖然彼之所以體究透徹者若能用此證據焉則猶以權衡辨鎔銖也楞伽四卷可以印心豈非斯之謂歟古今註楞伽者凡十數家至蘊益大師撰義疏以教眼之圓贍釋佛語之奧妙至矣盡矣余以禪暇沈潛此經有年矣寬政庚戌當先師十七回之忌景江湖禪流預請于余欲際此時同聚安居講說斯經一遍獨奈戊申之災印版半爲烏有於是與一二道侶謀之翻刻非容易可就也適值信心十數輩見義勇爲頓捨淨財全其功不日告成嗚乎余輩講說佛語猶德嶠所謂置一毫於太虛也唯是劫災之後寶函再全弘通利世使自他均登自覺聖智之城可嘉其功之隕矣是爲序 寬政紀元龍集己酉孟冬備陽井山林說謹

識 「大／雲」「林說／之印」

【刊語】（無點）

勢州四日市中町村田七右衛門法名道翁喜捨淨財開此卷所冀以此功德 念譽故願道專居士 却譽轉量壽榮善尼 善

譽故念住心居士 法譽光蓮壽性善尼 光譽闡教道壽居士 能淨三業之罪愆咸成清淨之因增進淨刹之妙果 施主道翁謹願

【〔刊語〕】（無點）

攝州大坂高麗橋三町目油屋彦三郎喜捨淨財開此一卷所冀 釋道西信士 釋道仁信士 釋妙孝信尼 釋賢眞信士
釋妙順信女 釋了眞信士 釋妙祐信尼 釋教意信士 釋妙教信尼 釋正意信士 釋貞意信尼 超流淨元童子 釋宗喜信士 釋逆修信尼 釋正貞童子 釋道廉信士 釋妙貞信尼 釋了意童子 釋教西童子 釋妙正信尼 釋智幻童子 釋智泡童子 各々靈位莊嚴報土

【〔刊語〕】（無點）

攝州大坂平野町三町目油屋德三郎施淨財若干刻此卷伏願流通無盡永續法燈現世富樂後生善處普報四恩傍資三有俱
露上妙之緣同證圓常之果又願以此功德 慈父宗喜居士 悲母喜圓善尼 釋惠教童子 梅岸智光童女 釋幻誓童子
橫超斷流童子 釋宗信信士 釋智證童子 各々靈位莊嚴報土

【〔刊語〕】（無點）

攝州大坂平野町油屋兼三郎喜捨淨財若干刻當卷所冀以此功德 專譽誠意信士 正譽貞圓信女 法性理玄童子 惠
光淨心童子 斷入覺眞童女 淡月春桂法尼 隨徃順教童女 各々靈位莊嚴報土

【〔刊語〕】（無點）

攝州大坂北濱難波橋鉄屋新左衛門施淨財若干命工雕此一卷所冀現世富樂後生善處又願以此功德 寂堂萬翁元照居士
一燈幽照居士 實相院明岳道照居士 古菱祖鏡禪尼 隨方惠順禪尼 各々靈位增進菩提

【〔刊語〕】（無點）

攝州大坂北濱難波橋肥前屋又兵衛喜捨淨財開此一卷伏願流通無盡佛燈永續現世安穩後生善處又願以此功德 釋東

滴信士 釋受直善尼 釋東銘 釋尚銘 釋尚宇 釋妙理 釋尚理 釋妙順 釋尚賢 釋尚貞 釋尚瑞 釋誓巡
釋普門 釋知了 釋花幻 釋庸甫 釋榮信 釋知隆 釋道有 釋道榮 釋知榮 釋知幻 釋宗運 釋榮薰 如說
院妙受日持 長壽院妙運日喜 指月智薰大姊 芳梅童子 复岳教順 仁岳讓興信士 能淨三業之罪愆咸成清淨之
因莊嚴安養之妙果

【〔刊語〕】（無點）

攝州大坂高麗橋苧屋佐兵衛施淨財而命工雕此一卷所冀以此功德 清譽淨意信士 〈三十三回忌之辰〉 願譽喜善禪
定門 照譽智光禪定尼 珠葉清珊童女 泰譽智珊禪定尼 正譽妙清善尼 各々靈位莊嚴報土

【〔刊語〕】（無點）

泉州堺紺屋町指吸七左衛門 喜捨淨財若干開此一卷願以此功德 春岳宗榮居士 〈一百年忌之辰〉 慈父正嶽宗因居
士 悲母節嶽慈貞禪尼 各々靈位莊嚴報土

【〔刊語〕】（無點）

泉州堺紺屋町指吸善兵衛施淨財開此一卷伏願流通無盡佛燈永續現世富樂後生善處普報四恩傍資三有俱霑上妙之緣
同證圓常之果又願以此功德諸州江海筌網捕獵鱗甲亡靈轉業得脫 施主善兵衛謹願 遣蓮社仰譽貞西信大德 觀蓮社
仰譽貞西信尼 嶽譽松雲信士 蓮譽貞性信尼 眞譽貞壽信尼 六親眷屬先凶後死莊嚴報土 冥正譽真教臨終正念
後生善處 次冀蠢々群類江海鱗甲轉業得脫 施主大坂 栗生氏 紀伊國屋與三兵衛

攝州大坂高麗橋油屋彥三郎母喜圓善尼喜捨淨財若干此一卷所冀以此功德
道童子猶法貞樹童女 能淨三業之罪愆咸成清淨之因莊嚴安養之妙果

心譽宗空信士 壽譽清空信女 宗元理

と改む。字靈空、號幻幻庵。近江國比叡山横川飯室谷の安樂律院を創建(中興 2 世)。

【094】

覺勝(生没年未詳)、江戸中期、真言宗、僧。大和國柴水山寶塔院吉祥寺住僧。【095】

慧堅(1649–1704)、江戸前期、真言律宗、僧。筑後國久留米の人。法諱慧堅、字戒山、號退耕道人。河内國青龍山野中寺中興 3 世、近江國東方山安養寺中興 1 世。【096】

伯英祖泰(生没年未詳)、江戸前期、僧。【097】

僧訓(生没年未詳)、江戸中期、僧。【098】

普明(1737–1805)、江戸後期、淨土真宗大谷派、學僧。法諱普明、字寶月、號法喜房・香光室・明月樓。豊後國府中の人。豊後國照雲山長福寺 11 世、筑後國光壽山永福寺 12 世、京都東本願寺高倉學寮擬講。謚號香光院。【101】

宣明(1749–1821)、江戸後期、淨土真宗大谷派、學僧。加賀國八田の人。法諱宣明、號巴陵・惠山子・圓乘院、通稱雲處堂。越中國開正寺 9 世、京都東本願寺高倉學寮第 6 代講師。【101】

神光(生没年未詳)、江戸前期、法相宗、僧。阿波國の人。法諱神光。元祿 9 年奈良藥師寺高範に隨學し、同 12 年江戸量阜(未詳)に寓す。【102】

宥範(生没年未詳)、江戸中期、新義真言宗、僧。法諱宥範、字又は號英存。東奥圓通沙門。京都智積院にて「六釋法式通關冠註序」を書す。【103】

慧淑(1669–1720)、江戸前・中期、真言律宗、僧。法諱慧淑、字湛堂。慧堅の弟子。近江國東方山安養寺中興 2 世、河内國青龍山野中寺中興 6 世。【104】

慈元(生没年未詳)、江戸中期、僧。金峰後學沙門。【104】

大雲林説(?–1795)、江戸中・後期、臨濟宗、僧。別號離有無子。備中國井山寶福寺 75 世。【105】

性善(1676-1763)、江戸中期、眞言宗、學僧。法諱性善、字洞泉。奈良東大寺戒壇・眞言兩院長老。【081】

淨嚴(1639-1702)、江戸前期、眞言宗、學僧。新安祥寺流の祖。法諱淨嚴・雲農、字覺彥、號妙極堂・瑞雲道人・虛齋・無等子等。河内國の人。江戸湯島寶林山大悲心院靈雲寺開山。【082, 092】

連常(生没年未詳)、江戸後期、淨土宗、江戸三縁山増上寺北谷所化僧。法諱連常。
【084】

慧嚴(生没年未詳)、江戸後期、淨土宗、江戸三縁山増上寺北谷所化僧。法諱慧嚴。
【084】

慈山(1637-1690)、江戸前期、天台宗、學僧。美作國の人。法諱慈山、字妙立、號唯忍子。
近江國比叡山横川飯室谷の安樂律院開山1世(弟子靈空光謙創建)。【085】

激隱(1655-1715)、江戸前期、淨土宗、僧。法諱激隱、號恒蓮社順譽聞阿。忍激の弟子。
京都獅谷法然院(善氣山萬無教寺)中興4世。【085】

白龍(生没年未詳)、江戸前期、僧。和泉國の眞言律宗寺院大鳥山神鳳寺住僧。【086】

亮憲(1539-1617)、戦國時代・江戸前期、天台寺門宗、僧。法諱亮憲。近江國長等山園城寺日光院住職、園城寺三院(南院・中院・北院)首座。【088】

眞慶(生没年未詳)、江戸前期、天台宗、僧。法諱眞慶。近江國比叡山延暦寺東塔東谷住白毫院創建、權大僧僧。【088】

寂明(生没年未詳)、江戸中期、眞言宗、僧・歌人。法諱寂明、字惠日、通稱阿闍梨法印。
【089】

敬光(1740-1795)、江戸中・後期、天台寺門宗、學僧。山城國北岩倉の人。法諱敬光、字顯道、號蘓峯・戀西子。近江國長等山園城寺法明院5世。【089】

一圓常爾(生没年未詳)、江戸前期、僧。『梵網經菩薩戒』を刊行して京都槇尾山西明寺(平等心王院)に奉納す。【090】

園文英(1609-1680)、江戸前期、臨濟宗妙心寺派、尼僧。圓光院瑞雲文英尼大師。贈左大臣園基任の娘、京極忠高の妻、後光明天皇の生母壬生院の姉。夫の死後出家す。
京都大悲山圓通禪寺開基。【093】

光謙(1652-1739)、江戸前・中期、天台宗、學僧。筑前國福岡の人。法諱光舜、のち光謙

谷。紀伊國風猛山粉河寺の十禪院を天台宗に改宗して十禪律院を創建。江戸東叡山淨名律院住職。【064】

師蠻(1626-1710)、江戸前期、臨濟宗、僧。相模國の人。法諱師蠻、道號卍元、號獨師。

常陸國太古山獅子院清音寺・京都妙心寺塔頭盛德院住職。【065】

亮潤(1668-1750)、江戸中期、天台宗、僧。法諱亮潤・豪雲、字大雲・眞詣、號東溪・一雨堂。近江國比叡山正覺院住職、大僧正、探題。【066, 069】

茨木方淑(?-1701)、江戸前期、京都、書肆。丹波國の人。本姓茨木、姓小川、號柳枝軒。
小川柳枝軒初代。【067】

全唯一賣(生没年未詳)、江戸前期、僧。【071】

惠傳(1553-?)、安土桃山時代・江戸前期、僧。【073】

尊宜(生没年未詳)、江戸前期、新義真言宗、僧。法諱尊宜。京都蓮華金寶山上品蓮臺寺中興9世。【073】

慶宜(生没年未詳)、江戸前期、新義真言宗、僧。京都普陀落山六波羅蜜寺普門院。
【073】

慧光(1666-1734)、江戸中期、真言宗、學僧。河内國彼方の人。法諱慧光、字戒琛、號虛心堂・虛圓道人・悅心居士等。江戸湯島寶林山大悲心院靈雲寺2世、奈良東大寺戒壇院長老。【075】

無等(?-1764)、江戸中期、新義真言宗豊山派、僧。武藏國廣瀬の人。法諱無等、字本寂。
江戸明王山無動院寶仙寺住職。【076】

藤原常香(生没年未詳)、江戸中期、俗人。釋尊隆の兄。【076】

玄彙(1790-1860)、江戸後期、臨濟宗、僧。尾張國善師野の人。法諱玄彙、道號萬寧、號玉桃軒。京都正法山妙心寺・美濃國金寶山瑞龍寺住職。謚號神機妙感禪師。
【077】

元雄(?-1740)、江戸中期、臨濟宗、僧。法諱元雄、道號乾巖。京都南禪寺金地院9世、左街僧錄、南禪寺289世。謚號大智圓通禪師。【078】

碩隆(生没年未詳)、江戸中期、臨濟宗、僧。法諱碩隆、道號峻道。相模國瑞鹿山圓覺興聖禪寺177世。【078】

秀石(生没年未詳)、江戸前期、僧。衣笠の隱窟にて『佛祖三經指南』跋を書す。【079】

法然院に住し、のち京都嵯峨寶筐庵に移る。【046】

圓慈(1721–1792)、江戸中・後期、臨濟宗妙心寺派、僧。近江國神崎の人。法諱道果、のち圓慈に改む。道號東嶺、號三光。白隱慧鶴の弟子。伊豆國圓通山龍澤寺開山。謚號佛護神照禪師。【047】

道海(1628–1695)、江戸前期、黃檗宗、僧。肥前國小城の人。法諱道海、道號潮音、號南牧樵夫。江戸萬德山廣濟寺開山。【048】

謙順(1740–1812)、江戸後期、新義眞言宗、僧。武藏國蒲生の人。法諱謙順、字豐春。京都智積院28世。【049】

宏源(1626–1682)、江戸前期、眞言宗、學僧。京都の人。法諱宏源、字覺翁、號大夢覺。京都北野朝日山上林苑觀音寺住僧。【053】

蓮體(1663–1726)、江戸前・中期、眞言宗、僧。河内國清水の人。法諱妙嚴、のち蓮體と改む。字本淨・惟寶、號無盡藏等。河内國藥樹山延命寺2世。【054】

宗覺(1639–1720)、江戸前・中期、眞言宗、學僧。京都の人。法諱宗覺、字正直。河内國天王山久修園院中興。【055】

以範(生没年未詳)、江戸前・中期、眞言宗小野流、僧。權大僧都法印。【056】

道光(1630–1682)、江戸前期、黃檗宗、僧。肥後國守山の人。法諱道光、道號鐵眼。攝津國慈雲山瑞龍寺開山。謚號寶藏國師。【058】

住友市十良重政(生没年未詳)、江戸前期、俗人。京都の人。京都五條坊門上柳町に居し、京都智積院にて『大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋』に加點・校合せしむ。【059, 060】

弘道(生没年未詳)、江戸中期、新義眞言宗、僧。法諱弘道、通稱八事山弘道、蟹滿寺弘道。山城國普門山蟹滿寺、尾張國八事山興正寺住僧。京都智積院30世弘基の師。【059】

高橋清兵衛(生没年未詳)、江戸前期、京都、書肆。【061】

大智(1659–1740)、江戸前・中期、臨濟宗、僧。肥前國の人。法諱大智、道號實統。【062】

日峯(生没年未詳)、江戸前期、僧。【063】

慧澄(1780–1862)、江戸後期、天台宗、學僧。近江國仰木の人。法諱癡空、字慧澄、號愚

の弟子。【029】

元政(1623–1668)、江戸前期、日蓮宗、學僧・漢詩人。京都の人。法諱日政・日如・日峰、俗名石井吉兵衛、字元政、號妙子・不可思議等、通稱艸山元政。京都深草山瑞光寺開山。【031, 039, 092】

錢屋庄兵衛(生没年未詳)、江戸中期、京都、書肆。齋藤氏、雲箋堂。【031】

眞常(生没年未詳)、江戸前期、臨濟宗妙心寺派、僧。法諱眞常。長崎寶池山德苑寺住職。【032】

淨慧(？～1725)、江戸前・中期、黃檗宗、僧。近江國の人。法諱淨慧、道號妙幢。鐵眼道光(058)の弟子。近江國箕山小松寺住職、駿河國都智山白岩寺3世等。【032】

周觀(生没年未詳)、江戸前期、僧。肥前國稻佐山寶壽蘭若沙門。【034】

行智(1778–1841)、江戸後期、修驗者。江戸淺草の人。法諱行智、字慧日、號阿光坊。江戸淺草銀杏八幡別當覺吽院住職。【035】

肯隱元統(生没年未詳)、江戸前期、眞言宗泉涌寺派、僧。京都泉涌寺84代長老。【037】

慈光(生没年未詳)、江戸前期、眞言律宗、僧。法諱慈光、字慧門。「三籍合觀後序」を和泉國の眞言律宗寺院大鳥山神鳳寺にて書す。【037】

慈鏡(生没年未詳)、江戸前期、優婆塞。【037】

性慶(1667–1737)、江戸中期、天台宗寺門派、學僧。近江國滋賀の人。法諱性慶、字義瑞。近江國長等山圓城寺法明院を再興し律院とす。【038】

密門(生没年未詳)、江戸中期、高野山眞言宗、僧。法諱本初、號密門房。紀伊國高野山圓通寺8世惠深房妙瑞の弟子、同寺9世。【040】

夢堂支覺(生没年未詳)、江戸前期、僧。紫陽朝日沙門。【041】

道空(1666–1751)、江戸中期、眞言宗御室派、僧。備後國の人。法諱道空、字如幻。山城國五智山蓮華寺住僧。【043, 050】

清慶(生没年未詳)、江戸前期、法相宗、學僧。奈良興福寺知足坊住僧。【044】

了空淨性(生没年未詳)、江戸前期、華嚴宗、僧。奈良東大寺地藏院住職。【044】

智暉(1717–1784)、江戸中期、眞言宗、僧。播磨國三草の人。法諱智暉、字大幻(大玄)、號空空庵。京都大原野春日寺・播磨國加東郡小山寺開山。【045, 072】

典壽(？–1815)、江戸後期、淨土宗、僧。江戸の人。法諱典壽、通稱典壽律師。京都獅谷

徳義(生没年未詳)、江戸中期、淨土真宗本願寺派、學僧。法諱徳義、字慧陳、號雷堂道人。京都妙覺寺住職。【015】

梁巖口湛(生没年未詳)、江戸前期、臨濟宗妙心寺派、僧。阿波國黃龍山慈光寺住職。

【016】

眞際(生没年未詳)、江戸後期、僧。【016】

如海(生没年未詳)、江戸前期、日蓮宗、僧。下総國妙雲山法輪寺(今の飯高寺)住僧。

【017】

前川茂右衛門(生没年未詳)、江戸前期、京都、書肆。【018】

道濟(生没年未詳)、江戸前期、真言宗泉涌寺派、僧。攝津國紫金山小松院法樂寺沙門。

【019】

觀應(1656-1710)、江戸前期、新義真言宗、僧。下野國の人。法諱觀應、號巧智房。京都智積院住僧。【020】

潭瑞(生没年未詳)、江戸前期、真言律宗、僧。法諱潭瑞、字又は號騰雲。武藏國金澤山稱名寺住僧。【022】

徳龍(1772-1858)、江戸後期、淨土真宗大谷派、學僧。越後國水原の人。法諱徳龍、字召雲、又少雲、號不淨室・香樹院。京都東本願寺高倉學寮第10代講師。【024】

寰山(生没年未詳)、江戸後期、曹洞宗、僧。法諱未詳、號寰山。江戸駒込諷訪山吉祥寺住僧。【025】

玄鉢(1711-1789)、江戸中期、曹洞宗、僧。法諱玄鉢、字斧山。面山瑞方の法孫、越後國瀧谷山字慶院慈光寺衡田祖量の法嗣。越後國大榮寺僧。【025】

何國百川(生没年未詳)、江戸後期。東毛龍華樹下。【025】

亮汰(1622-1680)、江戸前期、新義真言宗、僧。薩摩國田布施の人。法諱亮汰、字俊彦、のち淨泉。大和國豊山神樂院長谷寺小池坊11世。【026】

運敵(1614-1693)、江戸前期、新義真言宗、學僧。攝津國大坂の人。法諱運敵、字元春、號泊如。京都智積院7世。京都瑞應山大報恩寺に退隱。【027, 067】

道激(1636-1713)、江戸前期、黄檗宗、僧。近江國彦根の人。法諱道激、道號月潭、號惟徹・心華室。京都嵯峨直指庵の獨照性圓に參禪、隱元隆琦に隨侍。【027】

實光行圓(生没年未詳)、江戸後期、天台宗、僧。比叡山相似菩薩僧。天台僧實乘大僧正

作者小傳

- 忍激(1645–1711)、江戸前期、淨土宗、僧。江戸の人。法諱忍激、號白蓮社宣譽信阿。京都獅谷法然院(善氣山萬無教寺)中興2世。【001, 033】
- 隆榮(1809–1867)、江戸後期、新義眞言宗、僧。安房國打墨の人。法諱隆榮、字龍謙。京都智積院39世。【002】
- 寶雲(1791–1847)、江戸後期、淨土眞宗本願寺派、學僧。筑前國秋月の人。法諱寶雲、號烏水。筑前國長源寺住職。謚號寶性院。【002】
- 大含(1773–1850)、江戸後期、淨土眞宗大谷派、僧、畫家。豊後國岡の人。法諱大含、號雲華・鴻雪・枳東・染香人。豊前國城慶山正行寺住職、京都東本願寺高倉學寮第九代講師。謚號雲華院。【002】
- 圓明(生没年未詳)、新義眞言宗、僧。紀州根來寺西谷理趣院住僧。【003】
- 不必(生没年未詳)、江戸前期、淨土宗、僧。【004】
- 普寧(生没年未詳)、江戸中期、僧。【005】
- 淨眼範榮(生没年未詳)、江戸後期、眞言宗、僧。京都智積院住僧。【006】
- 基辯(1722–1791)、江戸中期、法相宗、學僧。尾張國の人。法諱基辯、號大同房。【007, 051, 099】
- 實養(生没年未詳)、江戸中期、新義眞言宗、學僧。法諱實養、字長與。陸奥國仙臺龍寶院住職。【007, 021, 023, 100】
- 探盈(生没年未詳)、江戸中期、僧。水戸沙門。【008】
- 岳譽(生没年未詳)、江戸前期、淨土宗、僧。【009】
- 宗朗(生没年未詳)、江戸中期、僧。法諱宗朗。【010】
- 前川徳右衛門(生没年未詳)、江戸前期、俗人。【011】
- 則中(?–1695)、江戸前期、淨土宗、僧。阿波國の人。法諱則中、號定蓮社禪譽。尾張國寶龜山相應寺住職。【012, 080 の即中か】
- 中野氏(生没年未詳)、江戸前期、書肆。【013】
- 天榮(生没年未詳)、江戸前期、淨土宗、僧。江戸無量山傳通院沙門、加賀國龍寶山如來教寺直弟。三縁山増上寺光學院4世の松蓮社吟譽天榮(?–1723)か。【014】

實養 007, 021, 023, 039,

【18 畫】

100

藤原常香 076

碩隆 078

藕峯 →敬光

【15 畫】

慶宜 073

寶月 →普明

德義 015

寶雲 →002

德龍 024

慧光 075

【20 畫】

慧門 →慈光

覺勝 095

慧陳 →德義

鐵眼 →道光

慧淑 104

騰雲 →潭瑞

慧堅 096

慧澄 064

【24 畫】

慧嚴 084

觀應 020

潭瑞 022

潮音 →道海

激隱 085

範榮 →淨眼範榮

【16 畫】

寰山 025

獨師 →師蠻

錢屋庄兵衛 031

龍謙 →隆榮

【17 畫】

謙順 049

斧山 →玄鉗	祖泰 →伯英祖泰	湛堂 →慧淑
東嶺 →圓慈	神光 102	無等 076
林說 →大雲林說	連常 084	萬寧 →玄彙
泊如 →運敞	高橋清兵衛 061	運敞 027, 067
肯隱元統 037		道光 058
長與 →實養	【11 畫】	道空 043, 050
阿光坊 →行智	乾巖 →元雄	道海 048
	唯忍子 →慈山	道激 027
【9 畫】	基辯 →基辯	道濟 019
亮汰 026	基辯 007, 051, 099	隆榮 002
亮潤 066, 069	密門 040	雲華 →大含
亮憲 088	寂明 089	
信阿 →忍激	常爾 →一圓常爾	【13 畫】
前川茂右衛門 018	探盈 008	園文英 093
前川徳右衛門 011	梁巖口湛 016	圓明 003
即中 012, 080	淨性 →了空淨性	圓慈 047
宣明 101	淨眼範榮 006	夢堂支覺 041
宥範 103	淨慧 032	慈山 085
洞泉 →性善	淨嚴 082, 092	慈元 104
妙幢 →淨慧	清慶 044	慈光 037
茨木方淑 067		慈鏡 037
重政 →住友市十良重政	【12 畫】	義瑞 →性慶
	尊宜 073	蓮體 054
【10 畫】	惠傳 073	
師鑑 065	敬光 089	【14 畫】
眞常 032	智暉 045, 072	僧訓 098
眞際 016	普明 101	實光行圓 029
眞慶 088	普寧 005	實統 →大智

收錄の各種辭書・事典等。

國立國會圖書館デジタル化資料(<http://dl.ndl.go.jp/>)收錄の各種宗派史・寺史・市史等。

インターネット上の各種寺院・大學圖書館・研究機關等のホームページ・データベース。

【1 畫】

一圓常爾 090
一寶 →全唯一寶

天榮 014

支覺 →夢堂支覺
文英 →園文英
日峯 063

行智 035

行圓 →實光行圓

【2 畫】

了空淨性 044

月潭 →道澂

何國百川 025

住友市十良重政 059, 060

【5 畫】

大同房 →基辯
大智 062
大含 002
大雲 →亮潤
大雲林說 105

以範 056
弘道 059
本寂 →無等
正直 →宗覺
玄彙 077
玄鈞 025
白龍 086

妙子 →元政

宏源 053
忍澂 001, 033
戒山 →慧堅
秀石 079

【8 畫】

【4 畫】
不可思議 →元政
不必 004
中野氏 013
元政 031, 039, 092
元統 →肯隱元統
元雄 078

【6 畫】
光謙 094
全唯一寶 071
如海 017
百川 →何國百川
艸山 →元政

典壽 046
周觀 034
宗朗 010
宗覺 055
岳譽 009
性善 081
性慶 038

邦人序跋作者索引

凡例

- 一 本索引は、本書收録の邦人序跋の作者について、第一字の畫數順に排列したものである。第一字が同じ場合は第二字の畫數順に排列した。
- 一 本索引は、次のような形式で記した。

例1 忍激 001, 033

例2 信阿 →忍激

例1は、作者名と序跋を收載する和刻本佛典の番號を示したものである。

例2は、和刻本佛典の序跋に記された號(道號・院號等)からも検索できるように、参照先を指示したものである。

- 一 本索引の末に作者小傳を附した。收錄順序は、本編での出現順序と同じである。
- 一 作者小傳には、作者名(生年-卒年)、活動時期、宗派、身分、出身地、法諱、號(道號・院號等)、住寺(所在・山號・院號・寺號)、謚號、その他を簡略に記した。
- 一 僧侶の作者名は、原則として法諱を挙げたが、法諱と號の判別がつかない場合は、すべて作者名として採録した。
- 一 作者小傳の末尾には、その作者が序跋を記した和刻本佛典の番號を「【001】」のように附記した。
- 一 活動時期については、便宜上、次の期間を目安に、江戸時代を前中後三期に分けた。

江戸前期： 慶長8年～元祿期 1603～1704

江戸中期： 寛永期～安永期 1704～1781

江戸後期： 天明期～慶應期 1781～1868

- 一 小傳の作成に當たっては、下記の資料やインターネット上のサイト等を参考にした。

鷺尾順敬編『増訂日本佛家人名辭書』(東京美術、1966年増訂3版)

日本佛教人名辭典編纂委員會編『日本佛教人名辭典』(法藏館、1992年1月)

柏原祐泉等監修『眞宗人名辭典』(法藏館、1999年7月)

稻村坦元監修・國書刊行會監修『曹洞宗人名辭典』(國書刊行會、1977年12月)

ジャパンナレッジ(株式會社ネットアドバンス、<http://www.japanknowledge.com/>)

編 著 者

會谷 佳光

日本漢文教育研究推進室 研究協力者
(財団法人 東洋文庫 図書部主幹研究員)

ISBN 4-903353-33-8

二松学舎大学日本漢文教育研究推進室
「日本漢文資料による日本像構築の國際的研究」

和刻本佛典邦人序跋集成

成田山佛教圖書館之部

2013年3月（非売品）

〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

二松学舎大学 日本漢文教育研究推進室

電話 03-3261-3535

Fax 03-3261-3536

kanbun-1@nishogakusha-u.ac.jp

<http://www.nishogakusha-kanbun.net/>